

百號發刊に就て

東藥會長 鍋島 豊太

東藥會報が今や號を重ねて百號に達した。百號——御芽出度い數——記念すべき號であります。昭和二年七月に其の創刊號を出してから足掛け十三年を経たことであるから、數としては必ずしも不思議ではないかもしれぬが、夫々別に本務を持つてゐる人々が、其仕事の餘暇を見付けて、居ながらではなか／＼揃ひにくい資料を蒐め、更に之を撰擇して容を整へるのであるから、其の今日に至る迄、克く繼續して來たと云ふことだけでも、關係した方々に對しては其の容易ならざる勞を感謝するのであります。創刊當時已に三千八百名を超へてゐた會員數は、逐年増加してやがて六千名にも垂んとし、内地各府縣は申す迄もなく、事變前に在りて已に會員在住の地域は南洋滿洲支那方面にも及んでゐたのでありますから、直接事變に關係ある職場にある者は勿論のこと、支那新秩序建設に産業開發等、事變の推移に伴ひ、會員の活動舞臺は從來に比して躍進的に擴大せざるを得ないのであります。其の相互間の情報機關として、東藥會報が今後更に大に發展すべき機運にあることが想像され衷心其將來を祝福する次第であります。

講師としての思出

所 金 藏

我が乏しきを承けし明治三十年の頃、私立東京藥學校時代より東京藥學專門學校の今日に至るまでを追想すれば、下山、丹波、池口、上野の四校長をはじめとして教授、講師等の實を易へられし人々甚だ多く、我が身の今日あるが摩訶不思議とも謂ふべし。

先だてて人をかぞふるおよびさへ
そとなはるべくにけりけるかな

明治廿年時代の憶出記

明治廿四年春 舊五回卒 大島 和吉

私が藥と云ふ事に關係したのは明治廿二年藥學校に入學してからで、丁度其年が法律第十號藥品取扱規則が發布され藥劑師、藥種商、製藥者なる者の資格が制定された時です。然も日本藥局方第一版が廿年に發布、第二版は廿五年に改正されて發布されたのです。然して廿年時代に大體藥に關する諸般の制度が纏つて居る事と思ふのです、例へば右の法律第十號を初め帝國大學では十年時代の製藥學科が廿年に藥學科となり第一期の卒業者は廿三年で、前々校長池口博士が第一期の藥學士、又前校長上野博士は廿四年第二期の藥學士である。又同年に衛生試験



山下先生

所の官制發布、廿六年に宮内省侍醫寮藥劑師の制定、廿八年に中央衛生會の官制發布等、又我々藥劑師の重大問題たる醫藥分業運動も廿四年の帝國議會からでは廿年の時代が我々藥業者に最も有意義の年であると思ふのです。それで私は其時代の事柄を想ひ出で記したのですが、何分四十年も前の事ですから多少記憶に違つた點もあると思ひ其點は豫め御諒解を願つて置きます。

○學校時代 私は明治廿二年に藥學校へ入學、廿四年に卒業同年藥劑師試験に合格藥劑師の登錄は廿五年十二月で登錄番號は第四一七です、偶然にも廿二年は法律第十號藥品營業並藥品取扱規則の發布された年でもつたのです。

場の一部にあつて私立藥學校の名稱でした、校長は山下順一郎氏、講師は丹波敬三、平野一貫、小林九一、柴山正秀、河村江、村上榮太郎（後續上と改姓）國友保民、古屋恒次郎、澤田駒次郎の諸氏外に第一期卒業の久保田力藏（現存）漆原兵吉の兩氏が分析と調劑の實習擔當で何れも大學の教授や奉職の方々であるため我々の授業は午前五時から六時からで又午後六時過ぎであるので日に朝晩と二回も登校するのでした、其時は電燈とか瓦斯のないので石油ランプを使用し随分薄暗でした朝の教授の時など遠方の生徒は午前三時宅を出るので提灯を持つて通つた方もある、私の入學當時の年齢は十七歳で十五歳の大谷源造君が一番若年でした、現今熊谷市で實業に従事して居られます、其處は年齢もマチ／＼で三十歳位の人もあつたのです、現在東京では私一人となりました、地方に三四名現存して居られると思ふのです。學校が下谷西町へ移轉したのは廿二年末でした、小學校の校舍跡で聊か學校らしくなつたのです、其後上野櫻木町へ移り夫れから現今の東京藥學專門學校となつたのですが、私の入學當時の名稱は私立藥學校であつたのが、たしか上野へ移つてから東京藥學校となつたと思つて居ります。そこで藥學校の最初は藥舖開業免許受驗者の爲めに藤田正方と云ふ人が藥舖講習會なるものを設け後十八九年頃かと思ふが大井玄洞氏が東京藥學校と改稱して校長となり次で下山氏が校長を引受け私立藥學校と改名せる由で藥學校第一期の卒業者（久保田、漆原氏等）は大井玄洞先生時代第二期の吉川新次郎、成島八百藏、中西忠吉等の諸氏は卒業試験（廿二年）を下山校長時代に受けられた者である、何れも此時代の人々は藥劑師試験の前で藥舖開業免許を得られて居る。

○東藥會の事 廿三年頃私の在學中に卒業生、在校生相談して同窓會を起した恰も庚寅の年であつたので庚寅同窓會と命名し其後會報も四五回發行した夫れから二三會名も變つたと思ふが

定期理事會開催

昭和十四年一月十九日（木）母校に於て定期理事會を開催す。

出席者 鍋島、船戸兩正副會長

（理事） 飯岡、永松、内藤、石渡、黒柳、川畑、鈴木、保坂、大堀、内田、桐、山本、加藤、可兒、内野、吉川

午後三時四十分鍋島會長開會を宣し、船戸副會長推されて座長席に就き、議事に入り左の通り決議す。

一、副會頭辭任に關し役員會に委任せられたる事項

原案を會長、副會長、庶務及會計部理事にて作成し次回の役員會に附議すること

二、會費に關する件

一、正會員にして昭和十一年度以降繼續十ヶ年會費を完納したるものは終身會員に編入すること

二、終身會費は拾圓宛年二回に分納することを得

午後五時二十分散會。

庶務、會計兩理事協議會開催

開催

昭和十四年一月二十五日母校に於て庶務、會計兩理事協議會を開催す。

出席者 飯岡、川畑、可兒、内田、桐理事

午後三時半開會左記事項を協議午後六時散會一、役員會より委任せられたる慰問品及慰問狀發送に關する件

學術部理事會

二月二十三日 理事會開催。黒柳、保坂、鈴木三理事出席左の事項を協議したり。

一、理事々務分擔

編輯、講演……… 保坂理事
記録、通信、連絡、會場……… 黒柳理事

そとなはるべくなりけるかな
模範校は神田岩本町で模範者小川忠四郎氏の工

た。夫れは模範士の細井修吉と云ふ人が（現在
河内省待待寮藥劑所長細井美水氏の親父）學長
の長谷川泰氏の懇望にて醫學學生に化學の講義を
なし呉れとの話から細井氏は快諾されたが同
時に藥學部を設立すべき希望を述べられたるに
對し、長谷川氏は經費の都合で初めは不可能と
答へられたが細井氏の再三の希望で終に設立と
なつたのである。其時の講師は堀有造、小林種
英、曲淵景章氏等で後に古屋恒次郎、上野金太
郎（學生時代）氏であつた出身者で小生の知人
では深澤儀作、菊地三之助、栗山六之助、茂木
七郎氏等である、然るに廿三、四年時代より醫
藥分業運動の初つて以來長谷川氏は醫藥分業に
絶體反對者であるので藥學部の細井先生初め講
師、生徒が一團となつて長谷川氏を説いても同
氏は頑強なる分業反對を曲ぐる事出来ず、此時
栗山氏は先達となり校長の分業に反對である學
校で生徒を養生するのは間違つて居ると廢校
を叫び講師生徒の有志が微文を起草し生徒に配
布せしとの由である。生徒一同も賛同したので
藥學部は廢されたのである、時に長谷川氏は意
外に驚かれた體にありしと夫れから長井、丹羽
の諸先生が心配され神田猿樂町に日本藥學院を
設立されたのでした、所が經費等の不足で設備
も充分でなく三、四年後に廢校にして其時の生
徒は丹羽先生の轉徙で下山校長の東京藥學校へ
入學されたのでした。

○藥舖開業試験の事 藥劑師試験は廿三年より
施行されたが其以前は藥舖開業試験が實施され
てあつたのです、ソレハ各府縣に於て試験受験
者があれば其縣より内務省に通知し試験問題の
到着を待つて受験し又内務省へ答案を送り合格
不合格の通知があるのです、又東京で廿二年最
後の藥舖試験の時は三百餘名の受験者があつた
が合格者は四十餘名との事でした、ソシテ試験
は學說文で實地試験はないのでした。

○藥劑師免許登録の事 藥劑師試験が實施され
て内務省に免狀が登録されたのですが以前の藥
師、齋藤澤平、寺島純實、吉川新次郎（東藥）佐

抜規則の發布された年であつたのです。此時代
模範校は神田岩本町で模範者小川忠四郎氏の工

希望者があつた、夫れで私は廿四年の試験
に合格したのが未成年の爲め廿五年末に登録して
其番號は四一七號でしたが實際は藥劑師試験を
受けた者の外藥舖免狀の書換で右の番號になつ
たのです。然るに書換をなさぬ人もあるものでま
だ全國を通じて藥劑師免狀登録をせざる藥舖免
狀所持者が多分ある事と思ふのです。



生 回 一 第 舊

○模範藥局時代 其時代藥劑師の資格を得ても
尙實習研究の爲めには藥學科の専科又は醫科大
學が出來たのでした、廿三年には可成りの書換
希望者があつた、夫れで私は廿四年の試験
に合格したのが未成年の爲め廿五年末に登録して
其番號は四一七號でしたが實際は藥劑師試験を
受けた者の外藥舖免狀の書換で右の番號になつ
たのです。然るに書換をなさぬ人もあるものでま
だ全國を通じて藥劑師免狀登録をせざる藥舖免
狀所持者が多分ある事と思ふのです。

○資生堂時代 私は模範藥局を一年間實習し實
業志望の爲め丹羽先生の紹介で新橋の福原資生
堂藥局へ入り實地研究をしたのです、福原有信
氏は非常なる醫藥分業熱心家で同氏の藥局に於
ても醫師分業養成家の高木兼寛博士の處方を引
受け日々數十枚の調劑を扱ひ又東京病院慈惠醫
院の藥局をも引受け藥局員も同店より出張從事
して居つた様な次第です、本店勤務として深澤
儀作（濟生學舍出）加藤金吾（海軍出身）大澤
道之進（東藥）夫れに私でした、又病院への從
事者は宅友吉（東藥）鷺尾伊平治（東藥）森
藤吉（東藥）龜田通太郎（東藥）川崎近雄（東
藥）市河顯純（東藥）小林潤三（東藥）の諸氏
でした。

○藥品の異名 此時代取扱つゝありし藥品にて
明治初年以來の藥品名で處方され賣渡されて居
りし二、三の藥品名を記して見る事とする。

昂	（ソツピル、又ズブリマタ）
リスリン	（甘油）
オレフ油	（ホルト）
沃	（ヘンドロ）
ヒマシ	（カストル）
乳	（ミルクシユガー）
重	（ベッキンソル）
硫	（エビソソル）
甘	（スイートポスター）
濃	（スターチ）
ケレモル	（クレームターター）
亞鉛	（チンクポスター）

然るに右等の異名を或藥局にてリスリン（甘
油）を肝油甘草末を白糖、硫吉をコロルナト
リムなど、間違つて處方又賣渡して失敗せし
者あるを聞きしました。

二月十五日午後六時三十分母校に於て本會學
術部第十三回學術講演會を開催された、當日は
生憎朝來の降雪の爲會員の出席者は少い感が
あつたが、何れも學究的肌合のもの多く極めて
熱心に聴取せられ、近來稀に見る講演會であつ
た。午後八時過散會。演題並講演者
一、石炭の化學
厚生省東京衛生試験所 田中 穰氏
製藥部 技師 田中 穰氏

二月十六日、午後六時より札幌市東藥會を珍鳥
に開催す。

參會者 青柳久平、高下義次、山寺敏三、布施一
郎、岩崎滋郎、佐々木健、田瀬貞男、檀上録郎
熊谷九郎、小林喜好、田中孝三、増田益の諸氏
（順序不同）

會務報告に次ぎ二、三會則の協議をなす。宴
に移り自己紹介となるや、各氏往年の學生時代
に想ひを馳せ、何れ劣らぬ珍談續出す。舊年業

庶務、會計……鈴木理事
二、第十三回學術講演會

保坂、鈴木理事分擔する事。
三、十四年度學術部豫算案の編成。
四、東藥會々則改正に據る學術部細則に變更案
の起草
五、彙報編輯會、近日開催の事。
六、學術部委員の補欠並に銓衡。
□二月二十八日 學術部彙報編輯會開催、保坂
理事、小谷野、鈴木（鐵）、中村（德）、三委員
出席、三月一日發行豫定の彙報に關し原稿の
整理編輯を協議す。

月下谷上野町（現在松坂屋北口電車停留場前）に藥局を開設したので當時は下谷區内に守田、汐見外二軒程の藥局があり又本郷區内にて本郷一丁目に松澤藥局（前副會長秋村武郎君が少年時代勤務）林藥局（中村信次郎君少年時代勤務）迎屋、平岡等六七軒の藥局でしたが、年々増加して現在の状態になつたのです、誠に今昔の感に堪へません。

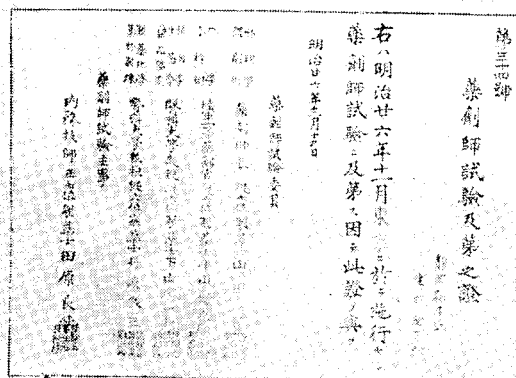
○終りに醫藥分業に關しての事です、廿八九年分業熱心家丹羽先生其他の有志の運動で三十年に至り醫科大學第一、第二醫院の處方を全部開放するに決定せしが、其時本郷の正門前又第二醫院の前に急に藥局を開設する者續出したのでした、私も第一期卒業の原三千彦君と共同して三益堂藥局を第二院の正門前に開きました其時原君の紹介で中村信治君私として福田信吉君を藥局の業務に依頼したのでした、大學にては會計其他の都合で一年餘にして處方は又従前通り院内藥局にて調劑する事になつたので私共も閉鎖した次第です、夫れ以來中村信治君とは今日に至る迄特別に親交して居ります。

（筆者は模範賣藥株式會社社長）

西町の私立藥學校 在校當時の思ひ出

明治二十七年春 生熊關三郎
舊一一回卒

私の入學は東京藥學專門學校の前身第二期下谷區西町時代、明治二十五年四月、神田岩本町から移られて間もない譯で、校舎は小學校を修築された事務室器械藥品室の外に講義室二つ、實驗室四つが主なる室制であつたやうに憶ひてゐる。丁度我邦に制定された新藥律が實施され直ぐにも醫藥は分業されるかの風潮で斯學の志望者多く、當時東京には濟生學舎に藥學科ありしも、本邦私立の藥學教習としては此所の右に出づるものはないとまで評判されてゐた。當時入學を許されたものは百名以上もあつたやうな。當時は男子であつたが、女子も入學したと云ふ。



證之第及驗試劑藥の時當

そしみ得るのであつた。

當時の定性分析室の屋根は破れてゐて、雨の日は實習室も下駄穿御免、而かも實驗臺の上には雨傘を掛けて雲を避ける状態で、互に困つたが、福岡、稻並、杉原、小林先生方に直接に長い時間手を取つて頂けた時は眞に嬉しかつた。又生藥の小野先生が時々獨逸から分刷で送つて来るケールルの生藥圖で講話されることや、確かな生藥圖を見せて頂いたことなどは、今も尚ハッキリと腦裏に浮出される。何となく、怖いと云ふ感じのあつたことは機械係に器具を借出しに行くのと、舟橋利翁が特製の椅をつけ隣附特別椅子に端座してゐて、眼鏡越へに叱言を聞かされることなどで、舟橋安サン、玉野鐵サン小使としてゐた某翁、某若妻など、屢々言合したことが思ひ出される。

斯く言を送る間には研究會を設け、年長者鈴木友七君を司會者として屢々時を費した事もある。翌二十六年の夏には御殿場に植物研究會が開催され、飯盛、平野、澤田先生等が萬事を指圖下され、開期中には柴田承桂先生も令息御兩名（今は御二人とも博士の）共に來會され、特に講話もして下さつた。この會は同地の芹澤信太郎、藪田龜吉兩先輩初め同地諸氏清水港に



書證業卒の時當

鍋島先生の來臨を仰ぎ盛會なりし 世田谷支部總會

餘寒尙嚴しき二月十四日午後六時より玉川芙蓉亭に於て第三回總會を開催。世田谷區に居住する、鍋島校長先生の御出席の榮に接し、本部より船戸副會長、大堀、内野兩氏の御出席を給はり今迄に見ざる盛會。岩村支部長脚の不自由に關らず元氣で先陣、東京病院の佐々木藥局長、此事變に相當腕を揮つてゐる池尻の柳田君、千葉縣船橋に移轉されたが欣然出席されると速達を以て返事を與れた吉田輝雄君、大阪で一働

生諸氏の遠く下山、丹波兩先生初め各先生方の想ひ出話し、ボロ校舎に快氣焔を誇りし紅顔の美少年時代を語れば、新人連中は發展途上の母校の模様を紹介。一同東藥の飛躍を衷心より慶び合ふ。



きして歸られた海軍機關大佐坂井爲吉君、第一製藥の宣傳部として其人ありと知られ今では奥澤に開局した内山義延君、新町に開業の眞井健二君「グラビン」製造所所長廣橋徹君、醫藥機械販賣會社事務取扱役水野彌一郎君、豪徳寺傍アオハ藥局と東藥館の間の二軒を築いて専ら研究

當時入學を許されたものは百名以上もあつたやうだ。資格は男子であれば學歴年齢に制限なかつた。小學校中學出あり、藥店主、

當時の小使帳に記入してある二、三の數字を見ると入學時の束修料が二圓、授業料が一圓六十錢、庚寅同窓會費が五錢、實習に入つてからの學納め藥品代が月二十錢、白金線を二寸五分買つたのが十四錢、白金板一寸方が七十五錢、角形大判濾紙一枚三錢五厘、酒精一ポンドが十五錢、その他の試薬も五錢又は十錢づつ本郷の林藥局等で譲受けてゐたのであつた。かやうなことで下宿料は大體三圓五十錢、理髪が五錢、風呂屋へは十錢出すと切符を十二枚得るので一ヶ月間はある。學費は先づ七乃至八圓が普通であつた。

更に月日は移りて在學一年有半、明治二十六年の秋内務省藥劑師試験に合格した者が同期生に數名あり、早く世の中に出て見たい氣分が満々とし、退學することを友人に相談したのであつたが、多くは退校は思止つた。とうとう海濱君と僕は決りかね、つまりは丹波監督に大學へ呼びつけられて「資格を獲得したからとて、育ての學校を忘れ、卒業試験を済ませぬとは不心得千萬」だと、したたかに叱責されて恐縮したものであつた。今まで行動したことのお詫びは叶ひて、明治二十七年の春第十一回卒業生として二十四名の方々と校門を出で茲に四十五ヶ年在學當時のことを思出すと赤面することは一再ならずである。

同期の方々のうち今も尚往復せるは小兒科の權威者醫學博士太田孝之、第一製藥監査役石川靜逸、再製樟腦の重役から今は千葉市に閑靜の日を樂める海濱善八郎、麹町に閑居の細谷厚三郎、山形縣南町長を永く勤めた山形縣藥劑師會長高宮喜之助、山梨縣谷村町に豊かな藥局を経営せる中島傳四郎諸氏で、その他にも健康で楽しい日を過されてゐる方あるべきも判然しない物語された方々に弔意を表して擲筆します。

(筆者は三共株式會社本社)

明かした想出

明治二十八年春 三原金太郎

東藥會報も第百號を迎へられた由誠に結構御目出度い事です、編輯の皆様の御骨折如何と存じます、夫に付何か昔の思ひ出話等の投稿を御希望ですが、御材料もありませんので、左に御笑ひの種に、つまらない事を記述します。

私は藥專にならないう前の第十三回生即ち明治二十八年三月、日清戰爭時代の卒業生、今は六十八歳の老翁です、學校は下谷西町にありました、其頃の校長は下山順一郎博士で以下丹波、平野、禮上、澤田、酒井、飯盛の諸先生、助手には安立、鈴木先生杯が居られました、生徒の常態として能く先生の習癖を真似するものですが、私等も相當茶目つたものです。丹波先生の眞似は講義中の辭として「ソノソノソノデスネ等々」飯盛先生は物理の受持でしたが御顔を見ると「をよそ」物體は一杯と小さい聲で眞似したものです。其外平野先生の鼻聲の眞似やら色々ありましたが忘れしました。

今の生徒さん達は完全な機械や裝置で實習が出来て誠に結構ですが、私共の行つた頃は極々簡單なものでした、製煉室は門をはいつて直ぐ右側の獨立した一室で製藥の蒸發に使用する大きな角火鉢が三、四個あつて製藥の順番に當つた五、六人が一日中實地製煉をやります、やがて三時になると、オヤツは大抵は燒芋で制前です。但しジャンケンで負けたものが買ひに行く其換り制前は出さぬ規定、たしか半釜十五錢だつたと記憶します、可なり澤山ありました、やがて喰べて居る處へ安立先生杯が來られる事があり、其時、瀝い顔杯なざる譯ではありませんが室へ入りきらぬ内に「先生ドゾ」と出す、其手早さ、先生も笑ひながら一緒に喰べられる誠に良い先生でした。原始時代の學校風景は又格別の味がありました。今はそんな事はありますまいが、其頃獨逸語の時間になると生徒は皆逃げ出して仕舞ひ、残るは僅かに四、五人、受持

の思ひがけました、恐らく試験科目にない爲でしよ、が、誠に悪いことです。私は殘留組でしたが一週一度位で入した習得も出来ません。爲に卒業後痛切に必要を感じ、九段下の外人經營の獨逸語學校の夜學に通學しましたが、中途で寒胃に罹り、或る醫師に肺結核の初期と誤診せられ其人は一緒に通學して居た醫師ですが、君はそんなに勉強しなくても字引をひけば間に合ふのだから勉強は止めてソノキに静養する方がよいとをどかさされ、遂に通學を中止し残念に思つてゐる位です。

第十三回頃は學校が相當に盛んになつて來た時で、中興時代杯と言つてゐました、今の方が御者になつたらをかしい位のものでせうが、今の學校の徽章も校旗も其時始めて出来たものです。(筆者は東藥會下谷支部長)

感慨無量

明治三十三年 伊澤弘芳

今の東京藥學專門學校の前身たる私立の東京藥學校が神田岩本町より下谷西町に移轉し段々擴張して上野櫻木町に移りし頃私は明治卅二年に入學し神田小川町より毎日通つたのでありますが、其頃の交通機關は新橋より淺草迄鐵道馬車より外は無いので毎日の事であるから近道を考へ駿河臺よりお茶の水橋を渡り本郷に出で岩崎の邸裏を忍池に出で動物園の裏の暗坂より學校に通つた行程五キロ餘其れも午前三時に起きて顔を洗ひ食事をして四時頃に家を出るので一時間餘を費し五時頃に學校へ辿りつくので夏は東天白々すれど冬は提灯を下げて雨の夜も風の日も雪の朝は牛乳屋の配達よりも一番先に足跡を付け足駄の齒へ雪が狭まりコロコロしながから漸く學校迄心細く通つた。其頃有名なお茶の水橋おこの殺しの噂が高かつた。其處を通るので怯びへて思はず知らず駈足をしたのであつた。學期は半歳を一學期として四學期二ヶ年で

オバ藥局を東藥出の弟中二君に委して専ら研究に勵む岩田理一君、三軒茶屋に堂々開業の山口

肇君、經堂の眞面目な藥局で通る横山普君、大藏に斷然光つて開業する渡邊覺君、小田急と帝都電鐵の乗換點下北澤の商店街に閑居の石井出席。定期既に着席直に岩村支部長より開會の挨拶あり。役員選舉は支部長に一任したる後當區より應召出征第一戰に御奮闘さる、坂惣八君、秋田文男君、上野甚吉君、白井義次君の武運長久を祈る寄せ書をなし、四君に對する慰問、留守を守る御家族に對する見舞の事を滿場一一致意する。次で鍋島先生の學校の近況に就き御挨拶を給はり、船戸副會長、大堀、内野兩氏相續いて時局多事の折東藥會々員の自重自愛協力一致を切望するとの肺腑に徹する激論の御挨拶あり。酒盛重なる頃出席會員の自己紹介あり、胸襟を開きての談話何時終るを知らず、和氣霽々各會員の頬紅潮して良き咽喉を開かずあり、愛馬進軍歌等も歌ひ出し圓満なる支部の結束振りを記念すべく寫眞を撮り、母校と東藥會との隆盛を祈る寄せ書をし芽出度散會したのは十時。當日缺席されし會員の近況を御返信により
岩野 長吉君 健康を害され臥床中
岩尾 裕之君 厚生省藥務研究所勤務
村岡健二郎君 東橫百貨店勤務
山田 榮一君 河合研究所勤務、北海道に出張中
山下 邦次君 日赤病院勤務、世田谷二一四〇三に移轉

(筆者は母校財團維持員にて東京神田に於て藥局經營)

明治三四年春
舊二五回卒
菊池新一郎

思ひ出咄し——と云ふても早や四十年の歲月は流れ、茫として夢の如しである。明治三十五年頃東京の街は多分に江戸の名残を留めて居た其頃私は神田から、馬糞糞々たる馬車鐵路の上を運ばれて、末廣町の黒焼屋や土藏造の間口數十間にも及ぶ松坂屋呉服店の前を過ぎて、上野山下の三枚橋で下車し、ガス燈の青白い光り凄寂の氣充ち／＼た不忍池畔から動物園裏の小坂を上りて、木造洋風の極めて貧弱な櫻木町の校舎に通ふたのであつた。鐵と電氣とコンクリートの文化に築き上げられた今日の東京とは實に雲泥の相違であつて、隔世の感轉々無量なるものがある。

◆校舎は、狹隘であり設備は現時の中學校にも及ばぬ貧弱であつたが講師は堂々たる先生のみで、日本藥學の權威者計りであつた。新日本藥業の基礎は其頃から培養されて居たのである。下山順一郎先生は監の中、虎のやうに黒板の前

◆其頃でも學校には海軍候補生型の制服はあつたが、殆んど着用手のものは無かつた。衣は肝に至り袖腕に至るの流行時代なので、學生は木綿緋に小倉袴で颯爽と大和田建樹作「青葉繁げれる櫻井の里のあたりの夕まぐれ」の唱歌を口吟んで歩いて居た、中には突飛な白袴を穿いて睥睨して居たのである、今日にして思えば京都の平塚君東京の松島君長野の小口君なぞであつたと思はれる。

◇卒業式の來賓には太田胃散の本舗主や、丸ボチ社長の雨宮綾太郎さんが見えられた、何を話されたか一向頭に残つて居らないが、「將來の藥業は諸君の双肩に擔はれねばならぬ、奮勵努力して、日本醫藥界の爲に折角邁進せられん事を希ふ」と結ばれ事々は思ひ出される。今日日藥總會などで「吾々は醫藥分業の爲に一路邁進すべきである」と堂々論議する議員の顔を眺めて、私達は只苦笑あるのみである。四十年前の理想は未だ其曙光さへ見えない今日である。百年河清を待つアボの果敢無さをシミジミと考へさせられる計りだ。

◇時は流れて半世紀、當時分業の旗下に奮闘せられたる平野先生、志村先生などの事を考えるのと感慨無量である、藥劑師の爲めの分業は、國家民衆の爲めの分業と、意義が變つて來て居る今日である。藥劑師としての權益を伴ふ分業は結局痴人の夢であると思ふ。

◇茅場町の一角に間口僅かに数間の土蔵構ひで、風々の聲を上げた源原商店、巍然として聳ゆる

◇丸ビル、東京驛附近、異國風物を髣髴せしめるビルディング街こそ一望荒蕪の青野原で、藥劑師試験の永樂病院が只一つ眞片隅に田舎の小學校然と建てられてゐた。其處に集つたクラスメード三十有九名、合格證を握るや多くは四散して其消息杳として知るもの無し、東京に阿久津君、伊勢に加藤君が製藥所を經營して業界に知られてゐる、秀才森弘平君、中華民國陸軍少將の對遇を受けて居つたが支那事變で彼の去就が如何になつてゐるかなどと考えられる。彼は半ば白玉樓中の人と化して眠る。筆を擱くに當り、謹んで藥學の先覺者たり藥業の指導者たりとし恩師と、机を並べて螢雪の苦學を共にした亡友の諸靈の御冥福を祈るものである。顧みて過ぎ來し方の長かりしを切に憶ふ。

明治三五年春
舊二七回卒
田中親介

私は上野櫻木町時代の第二十七回卒業生である。所謂秀麗清き東臺の健兒として、活動否茶目ツタ一人である。文か上野の森の誇りでもあり尙且つ私立の藥學校として、全國でも古き歴史を持つ學校として知られて居た。

卒業式には岸田吟翁翁の御顔を拜したり、島田三郎氏の御講演を拜聴するなど今は昔の語りぐさである、吾々の同期卒業生は、記念樹として楓を校庭へ移した關係からして、交楓會なまクラス會名を附した、同僚の吉田君は今故人とつた。名付け親をなくして吾々は懷舊の念を深くするものである。君は淺草仲町で本屋の令嬢として生れただけに、文才に富み、學生として相當の落ち着きを見せて居たクラスの模範生であつた、其他にないでもないが餘りに深く印

関西 T.P.C クラブ
昭和十四年一月十八日

蘇州磨坊即
行交佩
潘仲良確
潘老姑四弟
石神堡多子之
次柱保之助
山王上全士
武川淳二
親二弟

山口潤太郎
小谷值二
阪野十二極

進奉治
之行明

—東 藥 會 の 發 展 を 祈 る—

關西支部

専門部のみになる關西TPC會を去る一月十八日大阪日本橋「關口」に開催致しました當夜は降雨大變寒い夜でしたが會するもの十八名非常なる盛會でした、遠く關西の地より母校の御

下山順一郎先生は虎の中の虎のやうに黒板の前
を右に左に廻るす動いて講義をして居つた。丹

幸にも慶松先生は御健在であるから何んとか
して先生の謝恩會でも東都で催して貰ひたいも
のである。母校には澤山のクラス會がある、ク
ラスに傑出せる人物がないと何人とも言へぬ物
淋しさを感ずる、我が交誼會も恐らく物足らぬ
クラスに屬する事と思ふ、在校當時の抱負を思
出して恩師に對し誠に申譯のなき次第であると
苦笑禁し得ない。秘藏の寫眞で櫻木町時代の母
校を見ると、谷中のお松園子、坂下の燒芋屋
學校の東隣に當る薫風堂と云ふ製菓場はビスケ
ットの格外品を裏門から格安に提供してくれて
胃附を満足せしめた功勞者である菓子屋のあつ
たことも思ひ出である。

明治三十六年と記憶するが月も日も今は忘れ
た、下山校長先生が第二回目渡歐せらるゝに當
り、我が校友會は先生の送別會を、向島の花月
華壇で盛大に催した、寫眞は略するがプログラ
ム中、將に異形を放ちたるは近く見ゆるは、四
百メートル！ 遠く見ゆるは夏小袖、であつた
當時早稲田文學で有名であつた夏小袖を變り種
の加藤達里連中上演したことは特筆大書すべ
きことで、物堅い藥學生の内にも斯る趣味を持
つ、達里や、春連軍谷君などの涙ぐましい努力
は如何計りか、全く校友會の功勞者であると私
共は深く信する次第である。私は麹町永樂町に
あつた永樂病院に勤め身であつた時、試験場の
此所、彼所の壁に書かれたる短句を集めたこと
があつた、其内にも「氣情の風は永樂の野を吹
く」なる句は誠に意味深長な名句であつたと思
つた、當時受験藥學生に取りて永樂町は事實は
永樂ではなく、斷腸の思ひあらしむ氣情なる野
原であると諷した意で、幾多の悲しき物語も秘

其が今はどしどしと變り朝な夕なハイヒルの音を
聞く變れば變る世の中である。今一つ同試験場
の佳話を加へて見よう。此の試験場は醫學生と
藥學生とが交代的に來る受験場であるが、建物
が古い上に、控室は玄關口で極めて狹隘であつ
た。晝食時などは中々賑やかで、タマ／＼同志
で「秀麗清き東臺の」と校歌を口ずさみし一人
があつた、期せずして校友生は聲高らかに合唱
し始めた、此時不幸にも文部省の某監督書記の
咎むる處となり、主唱者を名乗れ、然らずれば
一同に退場を命ずと嚴命した。一同は肅然とし
た！ 此時達里加藤君は憤然と立ち、書記の官
僚的を大に痛罵し、終に試験委員の彼れは受験
生の爲めに大に陳辯に努め事なきを得た、好漢
達里今やなし、地下で苦笑するならん嗚呼！
最後に三重の東樂大先輩では森太吉翁、加藤
翠松堂社長變り種では千葉可庵がある事を記し
て敬意を表す。

東樂會埼玉支部會報 發刊の辭をものして

東樂會埼玉支部長 岸 市五郎

母校の發展は出身者と在校生との根強い愛の
力に俟たざるべからず。

世運趨勢人智の進成に伴ふて舊來の獨斷孤立
は許さざると共に目的の達成を圖ることは出來
ない。必ず一致團結の力に俟つの外已ない況ん
や母校の伸張においてや。

母校の發展は、自己生活向上の一因でありま
す。吾支部設置の今後は居一層に本會を利用し
互に融和懇親を圖り併せて智識の啓發し資する
やう致しませう。

本誌を會員唯一の連絡機關として毎年一回發
行致したいと考へて居ります。

第一號發刊に際して聊か撫言を述べ巻頭の辭
となす次第であります。(昭和六年五月二十日
發行)

東樂會埼玉支部發會式偲ひ出で

であつた、其他にないでもないが餘りに深く日
家を持たぬだけに記すことは見合せたい。

り池口校長の御實情を尋ふるは吾等の最も光
榮とし且つ欣幸とする所なり。

顧みれば創業實に四十年の古き歴史と幾多の
人材を輩出して藥學の發展に貢献せる所勢から
ざる光輝ある我が母校東京藥學專門學校は時代
の進運に伴ひ宇内の大勢に順應し今や内外共に
設備完く整備し校運益々熾んなるは誠に國家社
會の爲め慶賀措く能はざる次第であります。此
の光輝ある我が母校の榮譽を保持し益々校威の
發揚に努むるは我等の責務なりと信ず。

茲に於て大正十三年十一月東樂會は更生一新
の機劃を以て組織成り次て全國各道府縣に其の
支部の設立を見るの運びに至る。

我埼玉縣支部本日茲に發會式を挙げ母校愛在
校者出身者相互愛を以て大同團結し校運の進
展藥學の振張に寄與せんことを。吾等の責務重且
つ大なりと謂ふべし。將來常に母校と密接なる
連繫保持に努むりと共に學校當局の誘掖指導と
會員各位の自覺自奮に依る國家興隆の進展に我
等業界の發達に協與すると共に醫藥分業實現を
期し國民保健の實を擧げんことを。希くは會員
各位益々自重自愛共同一致以て本支部設立の精
神を體し目的達成に努力せられんことを切望し
て止まざる次第であります。聊か蕪辭を述べ以
て發會式の辭とす。

昭和五年五月二十五日、川越市★會議事堂に於
て、岸支部長式辭(口述)

故下山先生を憶ふ

明治三十六年秋 保坂 彦藏
舊三〇回卒

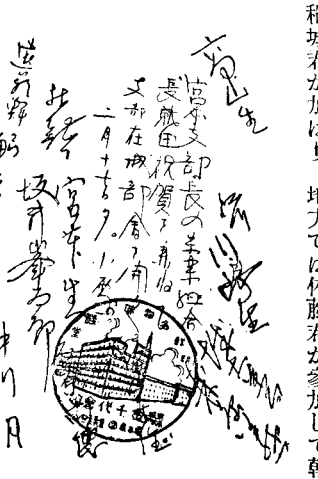
東樂會報の第百號の記念號を出されるに當り
會員の過去の思出を集めらるゝことは甚だ意義
が深い。

三十餘年前の母校在學時代を回顧するにつけ
第一に思ひ出さるゝは、母校並に恩師の恩、學
友並に同僚各位より受けた恩である。實に大恩
である。自分等の今日あるは、實に母校並に先
生方の御蔭であつて、父母兄弟親戚の恩と共に

隆盛を祈ります。

大正十年の末頃に京城で出身者が集まつた席
上、東樂會設立の議があつて、翌年一月に宮本
吉次、山岸鎌次兩君の名で京城藥報紙上に廣告
して朝鮮東樂會の設立を報じた處、第七回出身
の町田久吾氏を最古參者として新舊の在鮮者殆
んどから賛成加入の申込が有つた。で其の十月
に京城の松金で發會式を開き、出席者は(京城)
宮本吉次、坂本金次郎、山本初吉、山岸鎌次、
傳寶守一郎、高山賢太郎、(仁川)川崎藤太郎、
(平壤)佐藤善吉、(釜山)増野公平の十一氏で、
會長に宮本氏を推した。之れから昭和三年まで
は會長が色々との會の御世話をして下さつた。十
二月には母校から柏木へ新樂移轉の寄附金の勸
誘を受け、全會員に計つたが結局在城者に池田
稻城君が加はり、地方では佐藤君が参加して朝

鮮東樂會の名で之を完了した。翌年の集會で毎
月各家庭を巡迴して例會を開く案が提出され成
立したが實現されずに終つた。然し昭和四、五
年頃に此の案が再燃して二年間位實行され、
家族の方々とも懇親を得られて有意義であつた
其の頃に現城大藥局長の安本義久氏が御赴任さ
れた。先生は母校の教授であられたので吾等會
員は非常に懐しく思ひ歡迎申上げた。其の後は



日夜感謝して止まない次第である。

初め自分は植物學を専攻しやうとしたので、母卒業後就職の事は全然考へず、二十八歳まで學生生活を續けて居つた。その年の五月頃と思ふ。校友會主事の關戸喬一君が不幸病氣の爲め他界されたので、其後任に採用されたのであつた。自分の命ぜられた仕事は校友會の仕事の外獨逸語の講義をすることを命ぜられたのであつた。初めて月給を戴いた。母は黒緞の羽織と袴を新調してくれた。

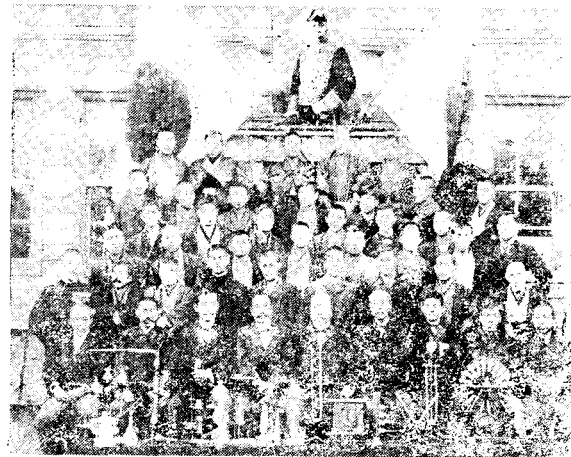
當時自分は谷中の願神院といふ臨濟宗の寺の境内の離れ家を借りて一人の學生(故遠藤桂吾君)と共に一緒に生活して居つた。

獨逸語の外に動物、礦物學の講義も命ぜられ夫れ等の試験も命ぜられた。其だ末熟で何も分らず、今から思ふと慚愧の至りであつた。此職務は三十歳の春まで勤務した。

二十九歳の春五月頃であつた。岡田春吉君が藥學博士の學位を得られたので、其祝賀を兼ねて校友會大會が向島の華月花壇の廣い庭で催された。實に盛大であつた。その時の委員長は藥學士橋本祐三郎先生であつた。(今はなくなられた)其計畫は實に立派であつた。其プランを先づ教頭丹波先生の許を得て、然る後校長下山先生の所にも行つた。學生として芝居や踊りをするのは不都合だといふのでお叱りをうけた。それから許可をうける其順序がわるかつた。校長はすつかり腹を立てられ、どうしても許可を與へられなかつた。計畫の中心は加藤龍彦、車谷春連、津川福一君等であつた様に思ふ。然し今更變更も出来ない事情にあつて居た。そこでどうしても下山先生の御許しを得ねばならぬしきとなつた。

丁度日曜の午後であつた。橋本先生や、西山貞氏や津川福一氏外一、二名僕の草屋へやつて来て、これ／＼しか／＼下山先生が御腹立ちで困つて居る。之から先生の御宅へお呼びに行きたいと思ふが、君は責任者(校友會主事)であるし、且つ校長先生の直弟子であるから、君と一緒にやつて貰ふのが一番具合が

譯で、直に仕度して一同五人であつたか、根岸の下山校長先生の御宅へ伺候して、自分等のやり方が悪つたのであるから、どうかお許しを願ひたい、とひたすら御託びを申し上げたので、初めは雰圍氣が中々穩でなかつたが、次第に穩かとなり、先生は一同の顔を見廻され、最後に先生の眼を見られ「貴様、おれの弟子でありながらなぞ斯ういふ事をした」と御叱りをうけた。一同は此言葉を有り難く受けて平身した。自分此御言葉を今以て難有いものと思つて居る。そして先生は「さう、怒るだけ怒つたから仲



生回〇三舊

直りに御馳走しやう」と仰せられ、立つて私服の上にインペネスを着られ、御自分から先に立つて、淺草仲見世の「奥の常盤」に御つれ下され、鳥料理を御馳走になつた。

先生は斯うした様な慈愛の人であつた。丁度醫科の方で申せば、故入澤教授の様な方であつた。

三十歳の折、先生の御紹介により且御保證の下に製藥界に入り、多大の御援助をうけたが、残念ながら事業は失敗に終つたが先生の御恩は大なるものがあつた。

其頃の私達

明治三十七年春 栗原 廣三

に達して居る。時々夢參して其當時の叱られた御恩を憶ひしのぶのである。

しかられた恩を忘れず夢參り 古句

小梅の常泉寺には先生の御墓の外に、故丹橋六太翁の墓がある。翁には色々御世話になり且御迷惑すらかけた。

思ひ出は實に澤山あつて、かき盡せないが、次の機會に譲ることとする。

(筆者はラヂウム製藥株式會社工場に勤務)

秀麗清き東臺の上野の森に聳立つと言ひたが餘り立派でもない赤煉瓦の我母校……今女子藥の位置にあつたあの懐かしき校舎を巢立つたのは明治三十七年の春だ。而して我等は意氣頗る野蠻大に努力したものだ。忘れもしないそれから五年目明治四十二年五月一日には母校々堂を借りて大講演會を開催した。曰く辰巳曾五週年記念講演會と稱して……而して今を時めく日藥副會長の柳澤君や井上達子君宮城光治君の面々は大に活躍されたものだ。何せバールセル化學工業株式會社の今井源四郎君などは農商務省實業練習生として獨逸にあつた頃で我等辰巳曾の鼻息は相當なものであつた。

私は其時「自殺と藥學」てな演題で重クロム酸カリなどのことを御シヤベリしたと記憶してゐる時移り世變つて猫イラズ時代——カルモチン時代となつたことを思ふと三十年の昔は何としてもノンビリしたものであつた。人の一代を世代といふが世とは卅年といふことであると古人はいふたが洵に其通りで先づ以て我等も有難いことに三十年を経過してまだ腰も曲らず生き居る。日記を繰りひらけてみると東藥全盛時代にいつか、あの昨年逝いた神原松籟氏や、既に疾の昔になくなつた加藤達里など随分活躍して業界の話題を製造したものだ。私は當時家郷で父祖の許に開業してゐたが、藥品巡視など

時々の例會は元より秋に地方會員が出城されるので其の候に總會を開いた。此の間に佐藤常吉山本初吉、坂本金次郎、傳寶守一郎君及地方在住の會員三、四名が退辭されたが新に渡辭された方々も有つた。昭和三年の初め東藥會朝鮮支部と改稱し支部長に宮本吉次、幹事に山岸鎌次高山賢太郎の兩人が就任、會員數は二十七名であつた。九月十七日に西本願寺で故丹波先生の追悼會を舉行した。先生には朝鮮へは度々御越しになつたことがある。當日は丹波四郎氏夫妻朝比奈先生、安本、國峰先生を始め一般同具者百餘名參列、丹波家、東藥會支部、帝大藥學科同窓會、朝鮮藥學會、同藥學校、同藥劑師會、實業藥劑師會、明友藥劑師會、刑務所藥劑師會等から生造花が供へられ頗る盛大であつた。

翌年七月に在校生の鮮滿視察團十四名が萩原嘉一氏監督で來城されたので會員の一部が案内役を引受歡迎會には全部出席して懇談した。川崎君には仁川の方を御願した。安本先生亦色々御骨折下さつた。

五年には丹波先生の胸像建築の議があり支部で取り纏めて寄附をした。其の七月第二回の視察團七名が渡辭された。案内等前回に倣つた。當日は生憎強雨で李王職秘國の見物など御迷惑至極だつたと今でも御氣の毒に思つてゐる。今回は御互に經驗があるので、具合よく行動が出来釜山では大矢、瀧江の兩君大邸では町田、佐伯、秋山の各位が何彼と幹旋されたと承つた。此の時分には江口岩男、吉田長次郎、森育造、君等が去られて和田享範、諸田勝四郎、小林隆平、大原善次郎、高羽祥策、猪方壽徳、飯塚滿の諸君を迎へ地方へも新進の方數名を増した。次で丹波四郎氏から令兄綠川畫伯が金剛山探勝に來られるので畫會を催したいとの依頼があつた。本町通明治製藥の樓上で開催し各係員の御骨折りで百數十幅を頒ち好成绩を上げた。同氏から故先生の書を戴き會員に分配した。

昭和七年には井上吉氏が見へられたので安本先生共々一夕會合して朝鮮情緒の一端を見て戴き、秋には地方から上城した會員も多く且つ山本鐵郎氏も内地から見へて久し振りに賑かな

に一緒に行つてあやまつて貰ふのが一番具合がよいと思ふから是非一緒に行つてくれるといふ

大なるものがあつた。
其後ラヂウム會社に

猶て父祖の許に閑業してゐた。藥品と祖傳の
も創早のことでもあり、巡視官も威張つたもの

總會出來了。

氏で側によつて警部補を帯同……藥局内を丁寧
に點檢した。ところで私は左の一詩を局内に掲
げてあつた。

○男子可憐蟲。出門抱死憂。

○女子歡樂友。脩飾當不知波浪。

之れを見て巡視官の曰く「相變らず詩經に曲く
なんてやつてゐるね……」と笑つてゐた。而し
て巡視の結果「ホーレル水」が悪るいとのこと
一本廢棄された。想ふて、一種の暗示を受けた
やうな氣持になり、當時矢駄羅に惚れることは
禁物だなど窃かに感銘したことがある。

(筆者は和漢薬研究所長、著書多数あり、餘りにも有名である)

臺南では

明治三八年秋
舊三三回卒
津川福一

私は第三十三回の卒業生だが、在學中當時の校友會發刊雜誌樂事評論の主筆をしたり、其他校友間の雜務を執掌するので落第勝であつたが當時の幹事小林九一先生に愛され、卒業後は助手をしたり、小林先生の代理事務も執つたり、多くのクラス會に關係をした。

學生が中途に入學試験を受けに來た時試験員たる私は時事新報を讀まして之で入學した事があつた。當時の生徒は藥店の小僧、番頭、中學出等雜然とした學力者の混合態であつたから今日の整然たる母校と比較したらお話にならない事が澤山ある。

雄辯家を以て自他共に認めて居る私は明治四十二年に臺灣に來てから、之がたゞつて今では信用組合の専務理事やら市會議員やら、アボとは縁の遠い境遇に活躍してゐる。併し、修得した學問を無駄にするのはいやだから漢藥種商を經營して居る。在學時代に顔を估つて居た私は滿洲、朝鮮、日本、内地を旅行するとき縣技師や藥局長級に知人が多いで愉快な旅行が出来る其都度母校を中心とした懷舊談に花を咲かせる時としては其土地で講演會を開いて呉れることもある。講演會と云つたつて學術のものはな

學時代は饅舌る事なら政談演説よし、落語講談よしと云つた工合で相等な自信が有るのだから堂々と落語、講談、童話の講演會を開くが勿論。

謝禮なんか毫も期待しない。謂はゞ道樂なんだから都合に依れば私から茶菓子位接待して聴かせやうと云ふ主催者に少しも迷惑を掛けない先生で何地でも大モテであつた。

臺南へ旅行する機會があつたら是非訪ねて呉れ給へ、もう三十年も住んで居るんだから津川つて聞けば老若男女誰でも知つてゐる位臺南では知名の士なんだ、従てもう骨を臺南に埋める覺悟で居る。

(筆者は臺灣で漢藥業に従事せらる)

みぞれ會の想出

明治四二年春
舊四〇回卒
池田
純幸

明治の何年頃建たのかアノ木造校舎は安下宿の古手位にしか見えなかつた。下宿と云へば一高を中途退學して東樂へ僕等と一緒に入學した栗原は贅澤な男で、一ヶ月金七圓五十錢の高等下宿に納まつて居た。講義の時も先生と、じ原書を見て居たらしい。小學校を出ただけの吾々の中間では、こいつがどうしても一異彩であつた様だ。

實習で學校中を惱ましたのが尿素の製造だ。鐵鍋を小便所へ出して其の上の方に「此の中に小便をして下さい」と紙に書いて貼てある。勿論忽ち一杯になるので夫れを七輪の上でグツ／＼煮るのだ。初めの内は差程でもないが、煮詰るに従てドギツイ臭氣を發散するのでムセカヘル様だ。それでも結構辨當が咽喉を通らなかつたとなぞと云ふやつは一人もなかつた。

生徒は随分不真面目な者もあつたが、下山先生の御講義には割合良く集まつて居た。アノ温顔で局方の講義をなさる時、亞砒酸の條の處で「亞砒酸の純度を九十九%にした事についてはわけがある（御前百迄わしや九十九迄借に白毛の生へる迄）」と云ふことがある」などとボツリ御冗談を御仰て笑されたものである。今でも

である。丹波先生は御講義中なぜか巻古の様の口調で「ソーシテカラに之れへサイテ」時だとよく御

温厚な先生では分析の佐藤先生が生徒間でも評判が良かった。先生には軽い痔疾が御有になつたがして時々ズボンの後方を右手で御搔きになるので、何時でも御尻の方へチョークの紛が付て居た。そして言葉も御國訛が漏紙をリヨンと讀まれるので年は未だ十七八歳位だつた田中浪吉と云ふ茶目が「佐藤先生はリヨンでリヨカシテケツを搔く」とよく云ふて居た。

何しな生徒の大多數は小学校だけの基礎學の素養で直ぐ専門教育を受けるのだから随分骨の折れたものだつた。一學期から二學期（今の一年學級を當時一學期と云ふて居た）へ上る時約半數近くも落第をさせられたものだ。從て文部省の檢定試験も容易な事ではなかつた。僥倖を頼む素見受験者も多かつた事であらうが、千三百人もの受験者中合格者は七、八十人位しなかつた。それ故當時の合格者は選ばれたる相當眞劍な勤勉家のみであつたから實力の點に於ては或は技術に或は處世術に今の専門をスナナリ出た人の中に及ばない人も澤山あらうかと思ふ

こんな風に檢定試験は六ヶ數かつたが、修業

年限僅かに二ケ年半であつたが頭の良いやつは在學中に學說實地共に取て居たものもある。學校の卒業試験の時、深井と云ふチャツボコ男が何を書いて來たか知らないが、自分かちには既に答案を出して外に出て居て。未だ中に殘て答案を書いて居る男の事を「傳寶守一郎は藥劑師だからキツトうまい事を書いて居るのだらうよ」などと云ふて居た。

卒業の時相談の席で何か記念にと皆の寫眞帳を作らうと話して居る處へ、或る春平の御喋べりが（忘れては居ないが名前だけは特に秘して置く）演段へ飛び出して「寫眞なんぞ寫したつて、つまんねへから大に呑んで別れようじやねへか」と云ひ出して折角集まつた金をとろ／＼呑んで片付けてしまつたのは今でも残念に思ふ

八年には女子郷創立のため寄附金を送附した。此の頃在城會員十一名、地方に二十七名で半島出身の人も五六人になった。年末近く池口會頭退任の計に接し在京の江口君を煩して花環を供へた。九年の花時に川崎君を煩し仁川月尾島に在城部會を開き一日の歡を盡した。此の時には村瀬三郎、洪元律兩君が加はつた。森島義一君を城大藥局に迎へたのも其の時分。

翌年二月に咸興の岩撫宜兄君が逝去され五月中旬には還曆に相當した宮本支部長が一週日に令嬢二人を失はれた悲嘆事が有つた。七月故池口會頭の紀念事業寄附に應じた。

十一年六月上野校長他界を新聞紙で知り遅れ
馳せに弔電した。中川明君の渡鮮されたのは此
の時分だつた。十二年四月頃本部から支部の會

[illegible]

昨十三年は支部長の還暦祝賀、山岸幹事の退
鮮、諸田君の應召入營などがあり又當地へ金根
圭、石原尙徳、韓正元達の新進を迎へ女子部出
身の小川嬢は安本先生の許で御精勤と承る。此
の間物故された元會員も數氏を數へ創立當時か
ら今尚健在で在鮮せられる方は宮本吉次、坂井
峰太郎、黛右馬次、川崎藤太郎、増野公平、大
矢吾松、佐野角太郎、高山賢太郎、湯藤實生平
賀三郎、町田久吾、秋山孝太郎の十二氏となつ
た。此の十七、八年間を回顧すれば書くべき事
は澤山あるが簡単に摘記して見た。

安本先生には常に本支部のみならず東樂會に
は御好意を持たれて種々御配慮下さつて居るこ
とを感謝して此の稿を終る。

[illegible]

て居る。其の時命名した會の名前が「みぞれ會」何んと云ふ跡形もなさうな會名だ。實は今更の様に一部改名の儀も出て居る。

そんなこんな思ひ出も既に二十數年の昔となり懐しの恩師も 方は物故せられ、自分達も早や中老の域に達した母校も幸にトク／＼拍子で發展して、自分等の子弟が二度目の御世話に成て居るものも多數におらう。

當時の同窓も今では在京者十五六名はあつて其の内で氣の合ふた六、七名は時折顔も合せて居る。

(筆者は友田製藥株式會社取締役、工場長)

思ひ出たまゝを

明治四三年秋 高山賢太郎
舊四三回卒

研究會なる「クラス」會が出来上つた當時策士が有つて書籍販賣所から買つた教科書が何錢か高値だと云ふので神田方面の書店から全員の分を購入之れを返却し其の差金を會の基本金としたなど相當ガツツリしたものだ此の會は今日も其のまゝクラスの名になつて居るが、當時毎月一、二回例會を開いて問題を募集し抽籤で之を解説報告するのであつた今大井の桃太郎藥局主小川保三君は「螢の光」と云ふ問題で有つたが之が報告に當つた同君は今日でも螢が「ニツクネーム」と成つて居る。

學生相撲四十二、三年頃國技館で新聞社主催の學生相撲大會が開かれた。今高崎に居る倉林三郎君が奔走して専門學校と認めて貰ひ、之に参加することに成つた。選手は規定四人、七、八名が名乗を上げた。今と異つて運動部などはなし若干の費用も入るので應援團を作り些少の寄附を募つた船戸忠助君が主に此の方を受持つた運動場とてない構内では稽古も出来ないもので、此の方は山崎景明君と僕とが當つて日暮里の風呂屋の主人を説付け其處の庭で毎日分析などは放つて置いて選手は盛に稽古をして済むと入浴と云ふ具合に仲々熱心だつた。當日は兩國公園

通り飽氣なく慘敗した其の折の選手には倉林三郎、下谷に居る菅生政明、淺草橋に開局の野田萬治、原田故作の四君で「ラヂウム」製藥の飯塚満君は小さくても控だつたと思ふ。

東京府人會 各縣出身に縣人會があるのに東京府人會が無いから作らうとの話が纏つて五六十名の會員が出来た芙蓉會の河合繁夫、宮川銀次郎兩君と山崎景明と僕などが世話役で當時先生だつた今臺南に在られる津川福一氏「ラヂウム」製藥の保坂彦造の兩先輩を顧問に願つて發會式を上野の三橋亭でやつた熱し易く冷め易い東京人は津川先生の渡臺を新橋驛に送り幹事を次期の人に譲つたが立消へたらしく、東京府人會の其の後を聞かない。前年津川先生が鮮滿の民政視察の途次茅屋を訪ねられ驛頭で愚妹が東京府人會の花環を差上げた當時の御話しをされ感慨無量のもの有つた。早や三十年の昔話し。筆者は朝鮮西大門刑務所醫務課勤務)



生先波反故

三十年になる

明治四五年春 鈴木 藤 磨
舊四六回卒

去年の秋、在京の彌生會員が京阪旅行をした折奈良の春日の社頭で、鹿を撫でながらの記念寫眞を贈つてくれた、學友の姿を見ると、母校時代を次から次と聯想される。

彌生會の名稱は、學校の運動會開催が動機で案出した筈だ、あの時は、田端の白梅園で庭旗を立て、吾組の標識とした。實に螢から組であつた。會歌も作つたと思ふ。

長坂良一、加藤勝、大給近施君等で、維持してくれて居た。同君等は金満家となつたと見え、會費の徴收もない、幸福な會員であると恐縮して居る。星名君の頭は、大陸地圖になつた、鏡に向つて對照したら、僕と兄たり難し弟たり難しである、何せ、三十年の歲月が夢のように流れた跡のことだ。

上野の森の奥、天王寺の墓地と向ひ合つて、二箇年半暮したのだ。併し、僕等は幸福な組であつた、明治維新後、西歐科學の勃興と共に、獨逸に遊學して研鑽し、歸來日本藥學の基礎を固めた下山、丹波、飯盛の諸先生に教を受けたのである。吾々の級は最終であつたらう。下山先生の概を、墨田の堤を通つて送つた、丹波先生から味の素の種あかしも聞き、將來の有機化學の發達は、皆この蛋白質を根原とする、即ち蛋白質は化學上不明瞭の物質の滯留であると教へられ、亦飯盛先生からは、あの功妙な手眞似で實驗し、真空管に放電して發する光を指し、將來上の光を應用して、意外の器械が出来たらうと言はれた客が現在も眼前に髣髴する右の外稻垣、村山、鶴川、橋本、神谷、佐藤直、西山、保坂、福森の諸先生は恩師である。西山先生からは母校去つて以來、引續き年賀狀を頂いて居る、嬉しいものだ。

其頃に比較すると、何もかも一變した、僕等が人學して間もなく、正帽をかぶせられ、次に靴となつた、此時は皆あはてた、一足の靴で玄關の見張りを何人も通過する名案を考出し、歸りは裏門から草履や下駄で逃げたものだ、三學期頃からは正服正帽となり、和服に烏打帽はなくなつた。淺草の活動寫眞の發達等も、吾々の熱心なる觀覽に原因して居る。

僕は二三年前、東京高千穂高商の川田校長と甲州街道を下ライブした時、ちらと現在の東藥の道標を見た。懐しかつたが未だ一回も參觀したことはない。今度上京の時は是非見よう、上野の學校は上京毎に必ず附近を通つて見る。古戦場は想出の種である。

交楓會(舊二十七回)の新計畫成る

春や春、春幾年のふることぞ。
東臺の櫻爛漫として散りもあへぬ校門に東西を分ちてより早やくも三十餘年を経過す。斯くて定命を越へ今や愛嬌の撫育に、或は子女の成功にあるは又家業の殷賑に動脈の硬化を忘れおるゝなるべし。

御互、世間へ出でし以來幾百となく他人様に交際しては、さて忘れられぬはあの頃東臺の學舎に硫化水素を嗅ぎ合ひ、坂町の焼いもやの竈の前に、はた又お松園子の遊茶一碗にサボを行ひし吾等の仲間なり。己が子の學業を見るとき、或は藥專の噂を聞くと、先づ思ひ出さるゝは誠に「あの頃」ならずして何ぞ、思ふて、「あの頃」を思へば硬化せる脈管にも若き血躍り、そゞろ青春のなつかしきに堪へざるなり。即ちこゝに極して毎年一回地を替へ交楓會大曾を開き、ともに青春を語り、逝きにし友を弔し以て東臺三年の交り短しと雖も、人生の旅立ちをこゝに選びしはつきせぬ縁なるべければ、ともゝに老後を樂しまんと欲す。まこと之れこそ青春、懷春の會にして將亦復春同春の會なるべけん。要項すべて別紙のごとし、奮つて楫に應ぜられんことを。

昭和十四年一月二十一日

交楓會要項(案)

- 一、本會は第二十七回生の生存者全員にて組織す
- 一、本會は毎年一回宛地を替へ春秋隨意の候に開催す
- (區分) 東京地區(東京府その附近)
- 信越地區(長野、新潟地方)
- 近畿地區(大阪、三重、四國等を包含す)
- 一、本會々費として毎月金貳圓宛を一口とし、應分の口數を假會計係高田源兵衛(振替東京三六二番)へ毎月御送込ありとし、但し一年分の御

假の世話人
東京 眞壁 正雄
同 高田 源兵衛
大阪 水谷 鐵三

に勢揃をして應援團共々堂々入場したが豫期の
彌生會は、内田兼一、佐藤孝吉、星名謙輝、
(筆者は山形市上町に於て藥局經營)

「藥劑師受験の友」覺書

大正元年秋 西大路隆憲
舊四七回卒

誰が云ひ出したのか知らないが同氣相求むるの
が十何人か集つて武蔵野會と號した。それも
いつか厳めしく武蔵野藥學會と看板を替えたな
ど思ひ出して微笑まれる。

其内に藥劑師試験をパスしたのが七人も出来
たから鼻息が荒くなつて來て何か事業をなと
云ひ出した。それでも物になつたのが一つ、藥
劑師試験の手引書であつた。其時分藥劑師試験
及第秘訣と云つた様な本があつて、受験子の虎
の巻になつてゐたが最新知識(是は本當だ)が
しかもズバリと七人顔を並べて執筆した。題し
て藥劑師受験の友。試験場の見取圖迄添えてあ
つて先づ搔ゆい所へ手の届く名著と計り一同悦
に入つたものだ。甲論乙駁、喧嘩の様な編輯が
終つてガラ刷りが廻つて來た。生れて始めて校
正の筆を握つた僕は只呆然とする計りであつ
た。何しろ一頁の中に活字が植つてゐるのが二
行か三行で後は只眞黒な下駄の跡がベタベタ續
いてゐる丈である。仕方が無いから原稿を見な
がら眞黒な下駄へ丹念に書き込んだ。再校が來
る。大分減つたが未だ、眞黒な方が多い。又
丹念に書き入れた。かうしてとうとう僕は原稿
を二度も三度も書いたわけである。Y坂の上を
且と云ふ可成り大きい印刷所であつたが「是は
ひどいですネ」と其家の主人がさすがに言ひ譯
けをした。當時のメンバーは飄飄屋藥房の平野
君、藤永にゐる岡本君、今は大間々に引込んで
ゐるが仲間での利ヶ者高瀬君等であつて入谷に
閉居してゐる松谷君は今でも區會に出たり盛ん
なものだが當時も僕達仲間切つての活動家で獨
り何から何まで奔走して呉れた。

やがて本が出来上つた。ポケットへ入るやう
な小さい奴だが手帳に掛けた本だと思ふと嬉し
くて耐らず五月の草を思はせる濃い緑色の表紙
をいつ迄も愛撫したものだ。此名著を市井の書
店の金儲けに委して溜るものと云ふ大變な權

事で我武蔵野藥學會で發行した。お蔭で東京堂
に何冊か賣つて貰つた切りで僕達の押入れに堆
く積まれてあつた。今早稲田に閉居してゐる和
久井君は中での策士で奮然として藥學校の前に
立つて宣傳すると云ひ出した。併し未だ生活に
不自由しない連中の事とて尻ごみしてそれもど
うなつたか分らない。

大正初期の頃

大正四年春 和田 二郎
舊五二回卒

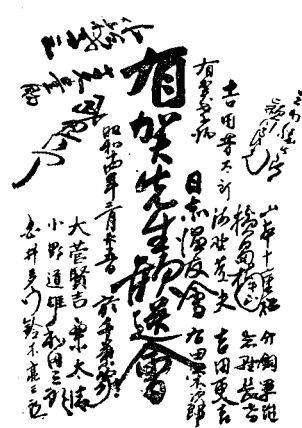
私の東藥へ入學したのは大正元年の秋だから
恰度其の年の春、明治四十五年に下山校長は薨
去された筈であるから、吾が藥學の開祖である
先生の聲援には遂に接しなかつた。慥か翌年の
春頃先生の一年祭前後小梅のお寺に同級生が揃
つて墓参した記憶がある。私の尤も懐しさを感
じてゐるのは校舎の前庭をかこんで築地垣が圍
らされてゐた其の情景である。其の寫眞を探し
ても何處へ入れ忘れたか付うしても判らなくな
つてしまつた事は何んだか惜しい氣持がする。
當時の先生は東藥の前後を通じて一流揃ひで丹
波校長が衛生裁判化學を、物理學は飯盛造教
頭、藥劑は池口慶三博士、藥用植物學は柴田桂
太博士、生藥學は朝比奈泰彦博士、其他神谷吉
兵衛、有賀孝治、大河浩一、望月直、小島勇之
助、稲田芳雄各學士、佐藤直、福森永太郎、野
口徳太郎、所金藏の諸氏で、毎年行はれた講習
會には村山義温博士、安本義久學士が名調子な
講義を爲したものだ。當時の學生は年少十四五
歳から年長三十前後と云ふ不揃であつたが割合
ひに眞面目で吉野少尉の厳格な軍事教練だけは
相當生徒を泣かしたものだ。私達は最年少組み
で休み時間と學校の歸りは上野の森、谷中の墓
地、遠くは三河島邊りを歩き廻り、三河島の原
地、遠くは三河島邊りを歩き廻り、三河島の原

懐しき上野の森

大正七年春 菱田 惺太
舊五八回卒

私は舊部即ち東京藥學校と稱した末期で、五
十八回の卒業であるから既に二タ昔以上は経過
してゐる。此の間母校は専門學校に昇格し更に
懐しき上野の森を後にして現在の柏木へ移り、
故丹波博、故池口博、故上野博と校長は變り、
現在の鍋島海軍藥劑少將が校長に就任されてゐ
る。他に舊櫻木町には女子部が設けられ、現在
秋谷博が校長の椅子に居られる譯であるが、思
ひ起せば實に感慨無量である。
當時は故丹波敬三博士が校長で、製藥士櫻井
小平太氏が教頭でそれに次で故池口前校長、朝

一、本報大體は東京外灘に於て發行するが、東京の地
區は決定す。但し東京地區と雖も必ずしも東京に開くを要せ
ず、豆相の温泉に開くも日光温泉の觀風をなす
も亦東北の山峽に開くも、それは當番幹事の
働きなり。
一、不賛成はなしと信ずるも兎に角別紙ハガキに
御意のまゝ記して御返事を下さる。たし。
一、會費拂込は當一月より實行ありたし。
本通知を發せし先
森田尚君、大川榮三君、飯田善次郎君、今井森之
助君、内野和一郎君、柏原一君、金谷文作君、
小鷹連平君、鈴木澤郎君、田中石貞君、田中親介
君、豊島與一君、永城貞君、野澤順司君
我交會會の各員に告ぐ左の如く返事有之
申意を表す
芳澤難有拜見仕候。
父は一昨年六月十一日死去致候。生前本會の開催
されんことを何時も々々々々口走り居り申候に其れ
も今は在りし日の思出と相成候。
御友情の程深く感謝すると共に御會合の皆様に何
卒宜敷御風聲願上候也。(永越ニキ子)



白櫻會總會 (專一)

去る二月十三日、日本橋千葉家に於て總會を
開催す。出席者十三名、廣島より公用にて上京
中の猪原君出席せらる、久し振りの會合故和氣
満ち、一同學生時代の若さに返へり次から次
へと……七時山本君の挨拶に初まり皇軍勇士の
武運長久を祈り、小生より前會の會計報告、會
務一般の報告後宴會に移り龍川君の好意にて紅
裙數名華を加へ酒は上酌はよし呑むにつれ酔ふ
につれ諸君の珍藝百出、特に猪原君の新珍舞踊
山本君の追分詩吟、西山君のおけさ、笠原君の

丹波校長も非常に盡力せられて居られたが、

の世に無い。私はいつでも諸先生の御冥福を祈

(筆者は磯野化學研究所主)

議士を演説する士。

大正九年母校に入学、まづ

事4回 磯邊館 重雄

朝上野の森の上、大正九年母校に入学、まづ窓口の會計さんに驚く、えらく御老人である。陣笠に弓の杖、ちよつと想像がむづかしい。學校の裏の本屋の御主人と後で分りました。其後に海軍中佐の鷺尾さんが名會計であり、毒舌家であり、鶴の如き瘦身であつた事は説明の必要はない。現在の校舍になつてから、よく小生と釣に行つたものです。其隣の窓の田邊書記も面白い方で、學校の歸りには、必ず博物館に出張する。考古學の研究ではない。碁を打ちに出かけるのです。守衛が懐かしがつて、學校が移つて、つまらないと云つてゐます。正面古風の鐘の下に、吉野生徒監が温かく、自分等を御世話下さつた。新入生にとつて杖柱である。机の

餘部退去を命ぜられる事が再三ありました。櫻井教頭は嚴格で、吾々は鑛物學を教はりましたがシユミットの古い版の様に、方程式の數字を上記されるのを質問する者も無い位恐ろしく嚴格でした。共立女子の創立に御關係になり校長となられました。丹波老先生が裁判化學を御講義され、柴田先生の植物學、朝比奈先生の生藥學、吾々は幸であつた。一年の主任が安本先生で、クラス會を寄席で開催。舞臺の御簾を上げると同時に大鼓をドン／＼と鳴らしたから大變、御簾が上がると現れた先生、眞赤に驚かす不眞面目なるクラス會に出席無用と歸られた。申譯がないと一同御託を後で申上しましたが、今思出しては若かりし日を懐かしみ居ります。先生は朝鮮で御大成、卒業生をよく御

總會出席を切望す

來る四月廿三日母校に於て開催の東藥會總會は、恰も昨秋會則を改正し、大正十三年以來實に十有四年の永き出身者、在校部一體の大團結より切離れ對社會的に自由に活動し得る眞に出身者のみを以て組織する第一回の總會であります。

當日は支那大陸各地の戦線に、或は内外地軍病院に應召勤務中の會員並びに滿ソの國境警備に任ずる多くの會員に對し、一同心から御武運の長久を祈ると共に護國の華と散つた會員の英靈に對し、滿堂深甚なる默禱を捧げたく且つ餘興として母校専門五回卒業の武井治郎氏が牙えた話術で興味深き時局新講談をお耳に入れる由、大東藥が如何に隆盛であり、會員が各方面に進出して、社會的に活動しつゝあるかを如實に具現する所以のものは一に會員各位の母校愛に燃える御熱情に待つ處多しと信じます。

是非共同窓、知己御誘ひ合はされて意義深き此日には母校の講堂に立錫の餘地無き迄に御參會下され、稀なる盛況を呈します様御勸誘申上ぐる次第であります。

社 會 部

想 出

專5回 齋藤榮太郎

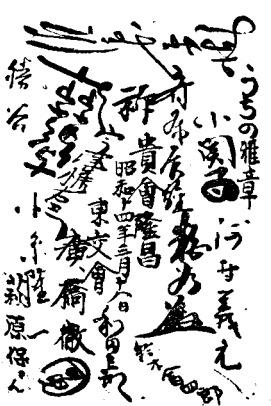
私が校門を出てからもう大分の年月が経つた大正十三年に卒業してから、年月は矢の様に流れて、母校も上野の杜から柏木に引越して仕舞つた。そして、池口先生も今では亡き恩師として、私の想ひ出の先生である。そして、も一人は今京城にゐられる安本先生である。

當時の私は、學校當局が見れば明かに毛色の變つた人間、いや生徒と見てゐられたかと思ふ池口先生の藥制の時間に、先生が「獨逸に於ける藥局制限論」を講義された。この講義に私が反對したのである。「藥局を制限する位なら、何も學校を建て、藥劑師を養成する必要はないでせう」と。池口先生は烈火の如くに怒られて口角泡を飛ばして、文字通り火の出る様な烈しい口調で、「藥局制限が如何に必要であるか」を説かれた。そして、私が卒業してからも數年

東 交 會 (專6回)

本會々員佐々木東湖君には今回滿洲拓殖公社囑託として滿洲國哈爾濱義勇軍病院に赴任する事になり、其渡滿歡迎と先般醫學博士の學位を獲得せられたる成毛武夫君の祝賀と、陸軍病院に戰病加療中の依田安司君、北支戰線に活躍中の三原清兵衛君、仙臺陸軍病院に應召勤務中の關慎一君、以上三君の慰問とを意味して三月十八日大塚新橋根に第八回東交會を開催致しました。此日の主賓たる佐々木東湖君、

を初め和田三郎、勝谷信男、小關子之吉、粕谷義一、可兒重一、小糸隆一、鈴木翁四郎、齋藤辰雄、宇津權右衛門、廣橋徹、荻原兼四郎(保平改名)河村義一、内野雅章諸君の十五名は定刻午後六時に參集。五本の扇面に夫々寄書してより佐々木東湖君、成毛武夫君を正座に開宴となり、大塚美妓の幹旋裡に盛會を極めました。



間は、年々藥制の時間に、藥局制限論に及ぶと先生の説に反對した生徒のゐたことを述べられたさうである。さうした話を私よりも後から卒業された人々から聞かされた時、私は何かしら自然と頭の下るのを如何する事も出来なかつた慈愛に満ちた先生。私に人間らしい人の世を教えて下さつた一人の先生は安本先生である先生は試験の後で生徒の答案を教室で一々批判された。その時「齋藤の答案は繪だか字だか判らない、名前がなくとも直ぐ判る。そして幾何も書いてない様だがよく読んでみると要點は書いてある」と。

又、私は雜誌部の委員を一年からしてゐたが三年の時、他の部の委員等と豫算其他で意見の對立して遂に牧野卓君と委員を辭めることを聲明した。この時先生は私達を呼んで、「君等はいふまでもない正直さからいけなさい」と世の中といふものがどんなものかを懇々と訓された。

それからの數年は夢の様に過ぎて仕舞つた、而も、尙ほ先生の云はれた本當の意味が理解出来ずゐた。其内東京に藥學會の總會のある時先生がわざわざ京城から見えられた時、私達同窓生は先生を迎えて小宴を催した。其の歸途、各自は先生の健康を祝して別れた。其の間、何時も先生はニコニコされてゐた。久し振りに見る先生に、私はあれもこれもと話しかつた。

併し、私よりも幾倍も口上手な級友に、先生の話題を持つて行かれてゐた。私は黙つて其等の話を聞いてゐた。「如何だね」と、先生は別れ際に、微笑し乍ら私に一度云つて下さつた。その一言で、私は幾萬言費したよりもの言葉を先生から聴取ることが出来た。そして在校時代に云はれた先生の本當の言葉の意味も、判然と理解することが出来た。

(筆者は東京市電診察所勤務)

あの頃・この頃

專6回 井上 修吉

上野の森と並立つてから(なんていふ言葉は

あまりゾツとしないが)十五年になる。もう三十五だ。人生五十年とすると、あと十五年しか目の目を見られないんだ。いやな気がする。自分はどうな仕事が出来るといふのだらうと考へるからだ。勿論自分など實際取るに足らない。ぐうたらな人間であることは、自分自身でも承知してゐるけれど、それだと云つて、このまゝ詰りなく人生を過してしまふことを考へると、いやな気がする。(さうだ、何とかして、近いうちに南洋へ行つて見たい。ジイドがコンゴ河を上つたやうに、自分はウラカス火山の近くを過つてサイパン、パラオと巡つてみたい。満洲とか支那とか、あんな通俗なところは嫌ひだが、南洋へは何とかして行つてみたい)。

自分は一年生の頃に牛込にゐたので、毎朝電車を通り下りて、池の端ビルディングとか云つた建物の第一階上野の山に寄つた方が何か店舗になつてゐた蜜蜂の巢が店先に置いてあつたが、その蜜蜂の出入を見てから、山の裾をぐるぐると廻つて、動物園のライオンの吼えるのを聞きながら大黒天の前に出て、学校の門を潜つたものだ。

三年生の時にあの大震災があつたが、自分は九月一日には故郷にゐた。十月の半頃、出掛けて来てみたが上野の山はバラックで一杯だ。北白川宮様の御銅像の傍にあつたキリスト教のバラック教會で、私は何回も説教を聞いたものだ。學校は二階がこはれただけで、前よりも綺麗に修理されてゐた。

震災で不自由したのは活動寫眞が見られなくなつたことである。自分は一年生の四月から、東京で封切られる映畫は一本も逃さず見てゐた(但し洋もの)。處がシネマハウスが焼けた爲に、それに大體活動寫眞どころぢやないもので、十二月になるまで、映畫は見られなかつた。年の暮新宿の武藏野館が開かれ、そこでミハエルグリゴリエフの指揮でセヴィラの理髮師を聞いた時、涙が出てしやうがなかつたのは私一人だけであつたらうか。

私にはあまり學校のことをあゝかうと云ふ資

格がない。といふのは、學校へ遅れて行つては後の方の席に坐り、教科書の上に世界文學なんていふ雜誌を擴げて讀んだりしてゐたからだ。まるで出鱈目だ。現在の精神的苦悶もなんと因果應報といふところであらう。矢張、學生時代は勉強に勉強をした方がよい。いや、すべきである。しかし最後に云ふが、インテリゲンツア(知識階級)といふのは斷じて學問をした人間のことを云ふのではないといふことである。本當のインテリと云ふのは、ヒューマニズムを創造する人間のことで、それは學問をしたとかしないとかは些も關係しないものなのだ。

(筆者は山形縣小松町)

餘興時代の雜話

專6回 成毛 武夫

「兄だけが藥劑師に成つても、もう一人藥劑師に成つてくれなければ困る」と親父に云はれ自分の頭とも相談の結果矢張り藥屋の傍は藥屋に唯何と無く氣の進むまゝに上野の藥學校と云ふのに入學を志願して受驗。

小學校時代の所謂本町仲間の高崎の幸ちゃん森田、中學の腕白仲間の勝谷、粕谷、木暮(故人)達と入學、學校其のものより友人の多數居るので嬉しかつた。

時は大正十一年春、卒業した中學も汚いが何て校舎かと思つた。着ない方がまし様の白衣をまといつてゐる方が、上級生で幅をきかせてゐる。(相變らずと思ふが)

登校二日目にして新入生歡迎會開催、自己紹介で猫イラストの存在を認めらる。

四日目で余興部の副頭取拜命、やれ京樂、それ大藥歡迎會だと引出され學校へ行くのに余興科があるのではないかと思はれるくらい。

吉野少尉殿の體操は名のみ一度も受けた事なし。

卒業旅行に一週間の許可がおりて永松先生に引率され關西旅行、いたる處の藥專で余興大會「東樂はすごいものだ」の名聲を残し、此處まで来たのだから九州に乗り出し、二週間休校し

其夜は昭和十年開催以來の事とし可兒重一君の挨拶に始まり、會員各々の近況を披露し、十四年前の學生時代に還つて、櫻木の母校の演壇で良く耳にした。懐しい昔の餘興を出し合つて懐古の情切々として身に込み愉快を満喫し、大いに氣勢を挙げましたが、夜の更くるのも知らず宇津内發聲で佐々木、成毛兩君の萬歳、可兒君の發聲で東樂會、東交會の萬歳を三唱して閉會致しました。尙閑宴中集めました慰問金にて適當の物を購入し、慰問の方法は幹事に一任し近日中に訪問又は發送される事になりました。

錄

三月二十日午後十時東京驛發の列車にて、佐々木東湖君は遙々渡滿の壯途に着きました。君は國家の爲滿洲移民の國策の線に沿ひ、義勇軍病院に赴任し、東樂健兒の意氣に燃え出身者の滿洲發展の先驅者として大いに奮闘する由、切に御自愛專一に御健闘を祈る次第であります。驛頭には東樂先輩山本十重松君、狩野君、同期の可兒、廣橋、宇津、小關、内野の諸君、家族親戚、知己多數の見送りあり、萬歳の歡呼の内列車は興亞の戰士を乗せて一路下關に走り、出しました。偉大なる君のスタートに多幸ならん事を心から祈るものであります。(内野雅章)

再興の意氣燃えて盛んなりし

敬藥會(專11)例會

二月十八日 大塚 新箱根に於て

二月十八日午後六時より大塚驛前新箱根に於て敬藥會(專11昭五卒)例會を開催す、集るもの十六名、舊臘總會を開き、會の再興を企圖し年に數回例會を開催會員の親睦向上發展に資せんと、野澤、田中氏等の御骨折により茲に本年度第一回例會を催すを得た事は欣快に堪えない卒業以來九ヶ年顔を合さなかつた新顔も見え、土屋君の得意の佐渡おけさの名調子を開き、田中君等の珍藝(?)續出する等賑やかに一夕を暮した。

尙次回は三上、布村兩君を煩はして五月頃開催することゝなつた。

上野の森を巢立つてから（なんていふ言葉は

一人だけであつたらうか。

一東薬にすこいものなれたの、名を知らず、
まで来たのだから九州に乘出し、二週間休校し

催することゝなつた。

で池口校長の御遺徳をそこねたのは今悔ひおぼ
ることの出来ない思出だ。詰らない事を書いて
筆をおく。
發展されてゆく母校及東薬會が、この時にあ
たつて益々御健闘あらんことをお祈りする。
(筆者は猫イラズ本舖主成毛英之助氏の御令弟
で今般醫學博士となられた)

追憶

專6回 内野 雅章
(良男)

愈々東薬會報も第百號を發行するに當り本會
の益々隆昌發展を衷心より祝福すると共に記念
特輯號の紙面を拜借して専門六回生の在學時代
の追憶と卒業後の近況とを收載して見たいと思
ひます。専門六回生は二學年在學中に東薬互助
會と稱するクラス會を組織して委員五名を互選
し、毎月學園の會費を集めて細則に従ひ會員の
親睦互助を目的とする會を結成しました。そし
て對内的には會員の共濟事業を起し、對外的に
は謝恩會其他の場合の資に當てたのです。例へ
ば地方の父兄から送金で遅れて學資に困つた會
員があれば無利息で短期の貸付をして授業料の
滞納者が一人も無い様になりました。特殊の事情で
下宿料が不足したとか、本が買へないとかの場
合に申出があれば一ヶ月一人に付金拾圓迄は貸
出をしたり、會員相互の物質上の利便は大であ
りました。又神谷、佐藤兩先生を始め會員相互
の意見と言ふ小使に至る迄、病氣して長く學校を
休む様な時にはクラス名で病氣見舞をししたり、
安本先生への餞別、クラス會、卒業生の送別會
等の會費、應援團への寄附等は總て委員と會員
とが協議して互助會の會計から支出して居まし
た。從つて精神的にも「本會は各自の利益、幸
福を享くる爲には學校當局の經營、施設、方針
其他に就き申言し、其實行を迫る(期す)」とか
「本會は腐敗分子及輕率妄動分子の善導を計る」
等と微細に細則を定めて實行し、校風の肅正に
盡力もしました。斯くして此會は昭和十四年の
春、卒業する迄繼續されて卒業後は東薬六回卒
業生の交りと言ふ謂で東交會と改稱して現在に

及んで居ります。其頃の母校は櫻木町にあつて
店構へは煉瓦造りで立派でしたが、中は木造で
土臺も腐つて講堂の如きは全校生集ると危険だ
と言ふ位で、どうしても改築しなければならな
い状態にあつたのです。併し資金が足りない。
其處で「先日學校の池口先生を初め諸先生から
委員に對し學校改築資金寄附に就て御依頼があ
りました。母校改築の必要は今更申す迄もあり
ません。而して當局は其の改築を急いで居られ
る相ですが資金が豫定額に達しない爲未だに着
手されない相です。之は甚だ遺憾なことでは
完成の一刻も早きことは卒業生の愛校心の如何
にある事と信じます。就ては學校の爲引いては
卒業生の爲何分の御寄附に預り度く、別紙寄附
申込書同封言々尚寄附金は一口壹百圓位との話
です。寄附申込書は委員迄御差出し願ひ取經め
て言々」と言ふ印刷物を豫め配つて父兄に呼び
掛け、三月二十四日卒業式後の謝恩會の席上、
申込書を取經めて校長に提出し、母校改築の礎
石となつたのです。現在彼の柏木の地に堂々
たる東薬が聳立し、施設の完備した研究室に、
校長室に坐る諸先生及び學の道に勵む生徒諸君
は眞に幸福であり、吾々が如何に建設に努力し
たかを充分に察して戴きたいと思ふのです。時
代の流れと共に兎角忘れ勝たぬ事を惜むもの
です。又人事部の未だ無い頃とて就職の斡旋も
學校では餘りして呉れず、自分で就職口を見付
けなければならぬ。其處で卒業後委員が相談
して「近頃母校宛に各方面より卒業生希望の申
込が相當に參つて居ります。就きましては現在
御從事の御職業が若し將來の御希望と錯誤致さ
れて居られますか、乃至未だ適當の御就職口も
無くて御詮索中とかの方々にて將來の御就職の
御希望と申込者の條件と相合致する點がありま
すれば其就職口を不取敢御紹介申上げ御希望に
沿ひたいと存じます。言々當番幹事」と言ふ印
刷物を東交會員に配つて職業紹介の世話しまし
ました。其後大正十四年八月、大正十五年六月、
昭和二年五月、昭和三年五月、昭和四年六月、
昭和八年四月、昭和十年十一月と七回東交會開
催、毎回頗る盛會を極め、今年は卒業後滿十四

年になりましたので盛大に催したいと思ひま
す。次に出身者の團體である東薬會と、在校生
の團體である校友會とが大同團結して大東薬會
が誕生したのも吾々の三學年在學時代でした。
此會則中に含む終身會員費貳拾圓也を何かと
費用のかゝる卒業の時に拂込まねばならないの
で可成りのお灸でありましたが、クラスの意見
が良く一致して大正十三年十一月二十七日に發
會式を萬世橋の萬世アークツに開催する事と
なりました。當日は在校生、職員、卒業生五百
餘名も出席し、午後一時四十分筑前琵琶の餘興
で始まり、大口喜六氏の講演もあり、式終了後
は晚餐會となつて大東薬會も愈々結實し、一大
發展への第一歩を踏出して大いに氣勢を揚げた
ものです。併し若しも上級生たる三學年の意見
が纏まらず、終身會員費も納まらず、出身者と
の合同も拒んだら、二學年、一學年も年賦拂込
まして終身會費お納めまいし、今日の東薬會の
隆昌も今少し遅れるか、大同團結も至難であつ
たらうと思ふ時、吾々六回生は東薬會の歴史の
上に大きな足跡を残し、大きな誇りを感じる次
第であります。

次に在學時代の第一印象は關西、九州の藥專
視察を兼ねた九州一周の卒業旅行でした。一行
は永松先生、堀、別所、陳、大澤、尾崎、和田
勝谷、吉岡、高崎、田邊、成毛、宇津、小糸、
寺田、三原、宮澤、平井、平尾、杉本、井上、
渡邊、岡、西郡、高島、中村、森島、増田の諸
君と小生の二十九名で、大正十三年十月七日の
午後五時半東京驛發の急行で出發しました。旅
行團の會計係は平尾、宇津、餘興係は成毛、小
糸、堀の諸君、藥專訪問の挨拶演説は小生がと
言ふ具合に役割を定めて京都、大阪、熊本の藥
專訪問から、大阪血清藥院、丸P會社の工場、
日本藥料會社其他の見學、櫻島、青島、耶馬溪
別府等の見物をして自由解散となり、夫々歸京
したので。併し餘り長過ぎた旅行として二十一
日に登校したら大いに池口教頭に叱言を頂戴致
しました。其後視察旅行の報告會で櫻島の熔岩
分析の發表をしたり、青島の地理的觀察を説明
したり、各藥專の施設の完備した點を報告した

會計報告。

收入 會費十六名分金四十八圓、野澤清人氏寄附
金二十圓、田中節三氏寄附金五圓、前會剩
餘金四圓十八錢(合計金七十七圓十八錢)
支出 料理代其他(新箱根支拂)金六十八圓七十
一錢、通信費金四圓(合計金七十二圓七十
一錢) 殘額金四圓四十七錢也

當日の出席者
三共株式會社品川工場に勤務
川崎市でオカ藥局經營
入江製藥所に勤務
王子で特殊合成化學研究所經營
河合製藥所に勤務
高橋誠一郎君
中村 德男君
田中 節三君
野澤 清人君
宮下 俊之君

土屋 利雄君
三上 美一君
花岡 巖君
阿久津 猛君
松村 明夫君
鈴木利一郎君
前島市太郎君

敬藥會 專一、昭和十四年度
第一回例會

現在でも在學當時と少しも變らず
現います。深川區高橋で藥局經營
日暮里で製藥業に従事、多忙です

昭和十四年八月、大正十五年六月、
昭和二年五月、昭和三年五月、昭和四年六月、
昭和八年四月、昭和十年十一月と七回東交會開
催、毎回頗る盛會を極め、今年は卒業後滿十四

昭和十四年八月、大正十五年六月、
昭和二年五月、昭和三年五月、昭和四年六月、
昭和八年四月、昭和十年十一月と七回東交會開
催、毎回頗る盛會を極め、今年は卒業後滿十四

昭和十四年八月、大正十五年六月、
昭和二年五月、昭和三年五月、昭和四年六月、
昭和八年四月、昭和十年十一月と七回東交會開
催、毎回頗る盛會を極め、今年は卒業後滿十四

昭和十四年八月、大正十五年六月、
昭和二年五月、昭和三年五月、昭和四年六月、
昭和八年四月、昭和十年十一月と七回東交會開
催、毎回頗る盛會を極め、今年は卒業後滿十四

りした時には叱言を言はれた池口教頭も頗る御機嫌だつたと記憶して居ります。仮而現在社會的に活動して居られる同窓の數氏を擧げて見ますと逸見孝三君は警視廳技手、和田三郎君は東京府藥代議員、可兒重一君は日本藥劑師會理事東京府藥理事及び各代議員、勝谷信男君は東京府藥代議員、粕谷義一君は第一製藥島島工場技師、依田安司君は中支戰線に部隊長として出征中、成毛武夫君は醫學博士、宇津權右衛門君は宇津救命丸本舖の重役、久保嘉助君は縣立福島病院藥局長、久納祐孝君は朝鮮總督府技師、小糸康容君は安田診療所長、小關子之吉君は大森實費診療所主、廣橋徹君は東京府藥代議員、平井新太郎君は平井運送店主、平尾實三郎君はレイト本舖重役、其他東京、地方は問はず手廣く開局して經營に従事する方々、官廳、會社に勤務し相當重きをなす會員を擧げれば限が無いので省略致しますが兎に角專門六回卒業生の羈氣満々たる處を見て戴きたいと思ひます。

擧筆するに當り東藥會の益々御發展を祈り合せて東藥會員皆様の御健康を祈る次第であります。尚前文印刷物の内容其他は總て小生所持の保存書類及び日記帳から轉載録致しました事を附け加へて置きます。

(筆者は東京府藥代議員に淺草に於て藥局經營)

舊 校 舍

專9回 長 瀬 雄 三

丁度我々が卒業した年に柏木に今の校舎が新築せられて引越があつたので、我々は上野の舊校舎の最後の卒業生であるわけです。今でこそ上野には女子部が新築せられて堂々たるものですが、新築前の校舎は相當ひどいものでした。受験に出かけて初めて校舎を見た時は「これが！」と思はず嘆息をついたのを忘れません。あれでよく實驗がやつてこれたと思はれる程です。その點新校舎へ移つてからの卒業生諸君は實に恵まれて居ります。然し實驗と云ひ、仕事と云ひ勿論建物が立派で、しかも器具が完備して居れば實驗が容易で、それでいながらと云つて出

來ない事はない。要は仕事にたづさはる人々の心組次第であらうと思ひます。不便をしのびつゝ不斷の努力をし、あくまでも頑張ることが人間を作る上から大いに役立つものだと思へば、我々はあの古い校舎に大いに感謝しなければなりません。とにかくあの舊校舎から幾多の大先輩を生み出したのかと思へば感慨深いものがあります。

(筆者は公立早岐藥學專門學校教授藥學博士)

校歌制定の思出

專10回 丹 善 一 郎

古き傳統の上野の杜をすて、柏木の新しい空を仰いだとき多感なりし我々の胸はひとしく古きに對する愛着の心と新しき門出の躍動との不思議な交錯に襲はれたことであつた。それが必然的にこの柏木の東藥とその上野に醸された傳統のスピリットを表徴すべき校歌の制定を希ふに至つた。

校歌制定委員會は歴史ある「藥學華吹け」を表現する詩人として北原白秋氏を依頼すべく全校の賛同を得た。その交渉を筆者がお受けしたのは筆者の叔父が白秋氏を師事せると、當時白秋氏の内弟子として同縣の先輩鈴木孝との交誼があつたからである。校歌の作詞を早く引きうけられた白秋先生は、このユニークな藥學の表現に非常なる苦心を傾けられた、校舎を限なく歩まれて漂ふ藥臭に印象を刻み、屋上から眺める富士に詩心をうたれ、世田ヶ谷から柏木迄肥車に阻れながら辿りついたのもそのときの想出である。

完成した歌詞を手にした委員達のよろこびは世田ヶ谷のお宅に先生夫妻を圍んでデタラメの曲に歌ひほうけたほどであつた。

やがてその作曲は白秋氏の轉旋によつて同く斯界の第一人者山田耕作氏を煩はすことになつた、銀座の日響に快心の作を得たと微笑みながらキーをたゞいて歌ふ山田氏の歌聲を忘れてなるものかと銀座に歌ひ延したり、校庭に教室に全校の諸子を集めて讀賣指導をしたことも忘れられぬ想出である。

池口校長のお宅のピアノをなんとか我々のものにすべし等いふ程かならず策動は實現せずにつたが、先生もとうとう御存知なかつたらうこの新しき校歌に送り出されて既に十星霜思ひ出づるまゝを記して本誌百號の慶びとする。

(筆者は茨城縣衛生課技手)

上野時代の思ひ出話

專10回 武田 義道

コジマリとした中庭を取り圍んだ赤煉瓦二階造りの古色蒼然たる建物——それが思ひ出多い上野櫻木町の舊校舎の姿である。

教室は階上の二年及三年の部屋はさうでもなかつたが階下の道路に面した一年の部屋は何となく薄暗い、廣い感じのする部屋であつた。折角の先生方の名講義も後の方では聴き取り悪く、黒板の字などはまるで見えなかつた。机も一枚板の至つて粗末なものであつて一年の時などは何でも四、五人が一つ机に竝んだ様に記憶して居る。實驗室も校舎の外観同様誠に古めかしいものであつて準備室も今の立派さに比較してお話しにならぬ程不完全なものであつたが總體古いなりにどこか落付いた感じがあつた。

併し風通りはよい方ではなかつた。暖房設備も完備して居なかつたが床が板張りであつたせいだ底冷えがしないので割合に凌ぎよかつた。食堂は當時福井軒と云ふのが出張して居た。一杯のコーヒはよく我々の勞れと渴とを癒し、盛澤山のカレーライス、ハヤシライス等は我等の空腹を充たしてくれたが食堂内に腰掛けの設備がなく立喰ひを餘儀なくされたこと、二年の時値上問題か何かで學生がボイコットを起し一悶着あつたことを覚えて居る。今は亡き校長丹波敬三先生は一年當時修身を受持つて居られた。色々な俚諺や格言の解釋、さては易學の話等面白可笑しく話して下さつた。

其の當時は只肩の凝らない面白い話として聞き流して居たのであるが母校を出て十年もした今日此頃になつて其の一言一句が何れも實社會に於ける貴重な處世訓であることを實に痛感する。



東友會例會

棍村勝君の榮轉を祝して

お彼岸入二日目で珍しく風はなく春光麗かであ暖かさに思はれたが尙外套をまとわねばならぬ程寒い。此の日去る一月末に銚子ヤマサ醬油研究所に榮轉された同窓棍村勝君所用で上京せられたのを機會に東友會は久方振りに三月十九日神田モリで棍村君の送迎茶話會を開催した。何しろ三月の學期替りと日曜日の事とて參會者は少數なりしも棍村君が母校を卒業後九大農學部湯川博士の教室で醸酵化學を専攻され御卒業以來暫く離れてをられた専門學科の境地に今回愈々其技倆を發揮するゝ事になつたのを祝福しつつ歡談は専門的に將又極めて學術的解剖に進み各自の意見續出愉快な懇談盡きず近頃いと有意義の會合であつた。

當日の出席者は粕谷、井澤、保坂、上田(武)、小谷野、竹内、鈴木(衡)、大内、金指、上田(武)池邊の諸氏にして、棍村君は夕方の汽車でお忙しく銚子へ歸任された。君の御健康を祈る次第である。(幹事)

居れば結構ですが、そうでないからと云つて出られぬ想出である。

いは、又三年の一学期の頃故長井長義博士が課外教授として御得意のエフエドリンを長講一席されたことがある、銀髪童顔如何にもシツクな感じのする先生の熱辯は盡きることを知らなかつた。軍事教練は入學當初は附近の大黒様（逢初橋の方に少し下つた左側）の前の廣場で行はれたが其後程遠からぬ谷中墓地の五重之塔から更に少し奥に入つた空地で實施される様になつた。時には武裝漂々しく（？）學校前に勢揃ひした。谷中墓地を通り抜ければ日暮里驛より省線に乘車、赤羽の工兵隊に隊伍整々（？）遠征したものである。晝飯には大底赤羽驛で汽車辨を需めて携帶したが密集教練に疎開教練に或は實彈射撃に汗かいた後茶の接待を受けながら味はつた辨當の味覚は今だに忘れることが出来ない。

上野の山の散策は我々に恵まれた楽しい日課

であつた。三月下旬から四月初旬にかけての櫻
花爛漫のお花見風景には生憎試験休みの關係で
出會はなかつたが中學時代よりの親友K君W君
と共にブラリ／＼と山を漫步した思ひ出は本當
に懐しいものである。當時は博物館前から精養
軒の方にかけて今の様に綺麗に刈られた緑の芝
生、數寄を凝した噴水、雅趣ある池等の人工華
はなく見渡す限りの廣場で所々に櫻樹が點在し
て居た。秋のシーズンともなれば此の廣場は小
學生の運動會に利用され、可愛らしい運動服に
身を固めた小學生のほゝ笑ましい競技風景に時
の經つのを忘れたものである。自治會館前の野
球場は當時は未だ形だになく不忍池畔も今程整
然として居なかつたが却つて野趣があつた様に
思はれる。ポート等も勿論浮んで居なかつた。

半年後に卒業を控えた昭和三年十一月故池田校長先生の多年の宿願であつた柏木新校舎が日に出度く竣工し同時に我々も懐しの上野に思ひ出多き舊校舎に惜しき訣別を告げることになつた。そして舊校舎は間もなく取り毀され其の敷地跡には今の女子部校舎が新築されたのである。

考へて見ると二ヶ年半の上野時代は餘の學生時代の懐しい思ひ出として永久に忘れられぬ。(筆者は厚生省東京衛生試験所技手)

思ひ出すまゝ

水谷 浩

郷しき百號の發行を見るゝことは御同慶の
至りで御座居ます。古き歴史を持つ母校を卒業
された諸先輩に比し餘りにも新しき憶ひ出でま
だ此の間の様なことですが、其れでも早や十年
昔から十年一昔と申します故懐しき母校のこと
を書きました。

此の東樂會報は我々一學年毎發行し始め題字は丹波先生の御筆に成るものと何つて居ります今は女子部のコンクリート立の建つて居る處に有つた櫻木町のあの赤煉瓦の舊校舎こそ忘れられないもので、卒業寫眞のアルバムに態々入れて記念とした程思ひ出懐しいものである。

この櫻木町の校舎で石屋様の刻むコンクリート
云ふ音を聞き乍ら、神谷先生の朗々とした化学



生先口池故

の御講義に一學年は始まりました。

昭和二、三年の頃と思ひますが先輩の方々に依りまして現校舍も建築着工せられ、その上棟式には雨上りの夏の道の悪い處を長井先生も見られた様に思つて居ります。長井先生で思ひ起すのは、先生が最後の御講義で「今後の有機化學に於てアルカロイドの合成をばし御墓前に報告せよ」と云ふ様な御講話を成されたことを記憶申し上げて居ります。

漸く柏木の現校舎も出来、緑の藥學、花咲けの校歌が出来たのも其の頃、そうして其の落成祝賀會は我々藥事生活中最も盛大なるものだと思つて居ります。

(筆者は高田製薬所勤務)

輝しき柏木の化學殿
堂に移るまで

久保田 敏夫

最初に入學したのはあの汚い朽ち果てた赤煉瓦の校舎だつた。と云ふ事が今尙新しい第一印象なのだ。上野の全山を満開の櫻を以て埋め盡す少し前の陽氣だつた様な氣がする。思つてゐる事を今から遠慮なく書いて見度いと思ふ。犯す罪にも係る様な事になりはしないかと思はれるが、たとへなつたにしても恐らく時効になつてゐるだらう。さう云ふ譯だから先づ御許しをして貰ふさ。考えて見るとどれもこれも實に滑稽で、憶出話も多々あるにはあるが、何れから書き出してよいやら前後轉倒で困却を免れない。

兎に角東藥の學生の決て毎日登校はするけれど

も餘りの汚い貧弱なボロ校舎には少からず遺憾の悲哀を感じ出してゐた事は疑ひもなき事實だつた。靜かに歩いてゐても突き抜け相な廊下、一寸ぶつかつても倒れ相な壁板此んな校舎であんな實驗室で試験管を握りバーナーを燃やし、或は教科書を繰りノートにペンを走らせたものだ。

惡臭を發するあの硫化水素の發生に際してさへ

もドラフトもない實驗室で行ふ事だからたまつ

たものではない。此の臭氣が二階の二年生の教

室に飛ひ込んで行く。前く抗議を申込まれたゆゑだ。然し「生意氣ナ! 貴族達だつて一年前

にやつたんぢやないか、お互順送りだえ一位の

氣持は持つてゐた事を記憶してゐる。然し乍ら

吾々は何時までこんな校舎には埋れる事を欲

しなかつた。何んとかしてもつと綺麗な校舎に

入り度いと毎日考えてゐた。全學生のお互の共

近した若き方は以心傳心遂に愛校精神の焔とな

野澤氏、前島氏、貴島氏、故川口氏之記意に

(野澤山) 南品山 音品山 古月山。言性
てゐる) の奮起を見るに至つた。もとより學生

は此の應募に不服のあらう筈はなかつた。クラ

ス委員の方々には奮闘努力に對しては今更乍ら

の敬服を惜しまぬものである。敢えて個人だけ

[illegible]

の敬服を惜しまぬものである。 敢えて個人た

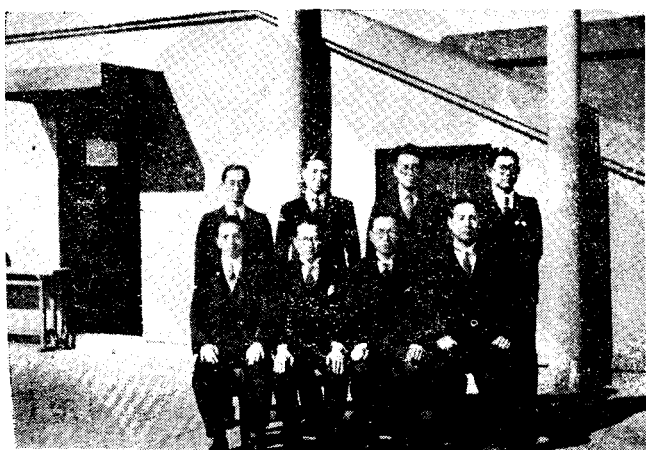
柏會例會

五井、鎮西、武者、竹内
小林五氏の送別會を兼ね

於新宿明治製菓

早春、二十三日午後五時、新宿明治製菓三階にて玉井助手(有機化學教室)、飯島氏(内藤教授室)、武者副手(調劑學教室)、竹内副手(分析學教室)、小林副手(無機化學教室)の五氏の送別會兼相會例會を開催す。劈頭中村助教授の深情溢るゝ聞會の挨拶あり。殊に勤續七ヶ年の玉井助手は昭和七年三月専門十三回卒業の秀才であり、幾多母校に功績を残し且つ柏會の立役者でもある。その同氏を失ふ事は實に惜しき極みであり、きゝ腕をもがれる思ひであります。其の他四氏も柏會の發表に盡力努力をして呉れた。此處に深謝し、我々は五氏の成功を心より祈り、新方面への門出を祝福する。特に武藤、松本、栗原(翼)三先生の御出席を感謝致す次第です。時に閉會午後八時。

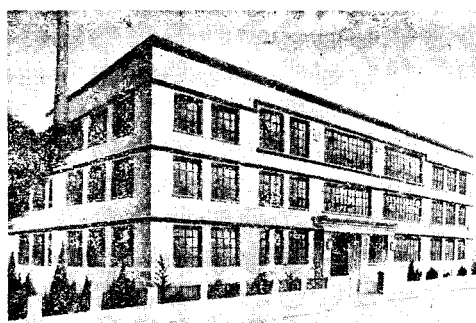
出席者 武藤、松本、中村(徳)、鈴木、玉井、



金指 栗原(五) 板谷 中村(三) 近
藤、飯島、武者、竹内、小林

を賞する意味のものではないけれども私として當時の事の憶出は？と問はれたならば矢張り此の校債發行に關する野澤氏の言動であると言ひ度い。氏の奮闘に對して自然に首が下りて凡ての感謝を捧ぐるに各ではないのである。押しも押されぬあんな堂々たる體格、重壓を感じる様な論調子、而も嚴然たる態度文字通りの奮起眞劍さには只々感謝措く能はざる處のものがあつた。氏は「此の校債發行による募集が満足に出来なかつた場合には自分は柏木の原頭に飽くまで頑張り最後の獨りぼつちになるまで肥桶をかいつでも必ず實現する覚悟である」と大見得を切つた時その眞偽の何んであらうと、若かりし自分は何か目に熱きものを感じた。是は實に野澤氏獨特の雄辯デスチュエーのみの有つ魅力の然らしむる處であると云ふには餘りに早計である。氏の獨特の雄辯デスチュエーに配するに氏の熱と力、眞劍さを以てせる物であると考へらる。空虚な能辯多辯は決して人を魅するものではない。熱と力、實質の伴はない映畫説明もどきの能辯は人を動かす事は出来ぬ。あの場合の氏の態度言動が立派にそれを裏書きしてゐる。而も氏ははじめ委員の方々の御奮闘は見るにあらずの障害難關を突破して遂にあの大事業を完成せしめた。愛校精神の結晶は遂にあの荒れ果てし柏木原頭に巍然としてクリーム色の輝かしき大化學の殿堂を聳えさしたのである。今や亡き池口校長殿をはじめ、諸先生の明らかな御容姿將來への希望と研究とに満ちた學生の健康な姿に新しい校舎は彌が上にも輝き満ちたのである。噫！思えば歡喜の涙だ。感激の涙である。尊い涙だつたのである。拙文の悲しき當時の感激の萬分の一を言ひ現はす事の出来ぬのが遺憾である。然し乍ら當時の緊迫しきつた情景に係つた方々に幾分なりとも思ひ出して頂ければ幸甚である。

と云ふ様な茶目振りを發揮した様な事もあつた。今から考へて見ると随分思ひ切つた不穩の言辭を弄して平氣でゐたものだと思ふことになる。尙小生は鍛道部に籍を置いた關係上時の部長伊藤生徒監獄より舊校舎の道場の整理を言ひ渡された。誰だつたかはつきり覚えてゐないけれども一年下の松本君、福田君、今は亡き親友立川兄と四人位だと思つたが、トラツクを雇ふのに随分苦勞をした。今でこそトラツクでも何んでも商賣氣を以て契約でも解約でも自由にやれるが何もならなかつた當時の學生では無理もないと思つた。途中何回も君にストップやられたか判りやしない。その筋へ届けもしないので四人もの人數が而も東京の眞中を疾走するんぢや



部子女校學門專學藥京東

ある校舎お別れかと思ふと遂泣けて來た。支那軍ならざる吾々而も純眞な學生達になんで焦土戰術をなし得様一掬の涙なきにしも非ず、むしろ親しみさえ覺えた。古い校舎の中庭でも云ふか此の一隅に對稱となる靴屋が毎日頑張つてゐた。奴さんその頃は何處かでカセイで居た事やら……當時櫻の花が咲いてゐたかどうかそこまでは生憎記憶がないのが残念だ。(筆者は水戸市加納商店勤務)

雜感三題

專11回 中村 徳男

破壊は建設の第一歩なりとは相對性原理ならずとも一面眞理ならざるを得ない。

昭和三年秋、池口博士等の御努力に依り永年待望の新校舎が柏木に建設され、少くとも専門十一回以前の卒業生にはあの懐しい上野の舊校舎が上野女子藥學校として誕生した時、自分は母校を卒業し直ちに母校の御世話になり、この上野女子藥にも高木誠司博士の助手として兼務を命ぜられた。間もなくこの古い煉瓦造りの校舎が一部分宛取壊され、其處に段々と鐵筋コンクリートの現代式建物が出来上つてゐた。或日最後の棟が壊され白煙豪々たる中に入つてゐた。それは柔道場、女子藥學校となつてからは卓球場となつてゐたものである。ふと壊されてゆくハメ板の上を見ると、自分と同窓の久保田敏夫君や、立川左武郎君始め、鍛道部員の名札が掛つて居り、それらが次々と落され破壊されてゐた。此時の光景は今でも忘れられない。何となく哀愁を禁ぜざるを得なかつた。

在學時代この久保田君と立川君がこの道場で胸のすく様な試合をよくやつてゐた。この兩君の卒業した以後校友會の鍛道部にこの様な試合ぶりを見た事がない。この立川君は卒業後間もなく近つてしまつた。久保田君は先般鍛道練士の稱號を允許されたと聞く。御精進の程が偲れる。現在上野の舊校舎跡には瀟灑たる近代式の建物が東京藥學專門學校女子部として現出して



藥局メモ

◆藥用ハトムギ洗粉

荳 乳 三六〇
粉 五〇
馬鈴薯澱粉 二一〇
メリケン粉 二一〇
重曹 四〇
安息香酸ソーダ 一五

にきび、ふきでもの等に効果あり。
惹致仁の蛋白質が浸透力が強く皮膚に對して好影響を與へるによる。(素堂)

◆家庭で造れる靴墨の製法

まづ靴の靴出し原料であるカルナバウ蠟一五瓦と、蜜蠟三瓦とを破皿に入れてよく攪拌しながら強火で加熱溶融し、これに苛性ナトリウム一瓦を少量の水に溶解したものを加へドロドロの乳状液を作る。次に強火をトロ火になしこれにパラフィン五瓦を入れ溶解し、黒色又は茶色の染料二乃至三瓦を蓋に三杯位の水に溶かして加へ根氣よく攪拌しながら、最後にテレビン油四〇瓦加へて硬さになるまでトロ火にかけたまゝ混ぜ合せると出来上ります。

染料は黒色ならニグロシン、褐色なら水溶性ブラウン、茶色ならオイルオレンジがよい。

◆硝子の色に就て

色硝子の色について御參考まで申し上げませう。硝子成分に各色によつて次の様なものをに入れて居ります。

緑黄色……酸化鐵、マンガン
褐色……料炭、黒鉛、小麥粉、コークス、石灰
灰色……マンガン、酸化鐵、酸化銅、酸化ニツケル、酸化コバルト、ウラン酸ソーダ
黒色……マンガン、酸化コバルト、酸化銅、酸化鐵

此等の中で酸化鐵、硝子、コバルト硝子、綠色鐵硝子、マンガン硝子等の光に對する比較左の通りです。(單位%)

酸化鐵硝子 青色 綠色 黃色 赤色
コバルト硝子 一〇〇 二〇〇 三〇〇 四〇〇
綠色鐵硝子 一〇〇 二〇〇 三〇〇 四〇〇

當りてきて落ち行く壁土を眺めて氣煩を揚げ
感を抱くであらう。
今や忠勇なる陸海の精銳が支那全土を席捲し
連戦連勝赫々たる武功を立てゝゐる狀況は新聞
に、映畫に見られるが、此處彼處に破壊の跡を
見るとき、自分は力強い建設の第一歩は印せら
れ、興亞の新秩序の確立間近の感を禁ぜらる
を得ない。

東藥會報が發刊されてからも十二年に
昭和二一年七月三十一日附で第一號が出たの
であるから、自分が母校に入學した年即ち一年
生の時である。従つて専門十一回以前の卒業生
は第一號からこの第百號まで手にしたわけであ
る。然しこの會報の百號まで揃へて保存してゐ
る人が何人あるだらうか。甚だ失禮な質問では
あるけれど……曾て三年前前に東藥會が保存
用會報の一部を紛失し欠號が出来た時、第一號
から其當時發行の第八十號まで全寄贈した人
があつた。それが何んとモノコ洗粉本舗主と
して寧日なき山本十重松氏であつたとは。氏の
會報に對する認識には敬意を表せざるを得ない
自分が第八十五號即ち革新號(菊倍版に改正)
以來編輯部委員の一人として編輯に與つてから
感じた事であるが、毎月會報が現在四千六百部
發行されるが將して會員が隔から隔までよく讀
んで呉れるだらうか。會報に對して關心を持つ
て呉れるだらうかと思つたが、先日或人が種々
の新聞が澤山来るが中には開かないで其儘捨て
ゝしまふものもあるが出身學校の新聞だけはよ
く見て保存して居ると云はれたが、成程さうい
ふものかなと考へた。

編輯事務に與つた人は誰でも感ずることと思
ふが好意ある忠告やら注意をして呉れると非常
に嬉しいものである。

本會報が革新號以來毎月定期に發行され、内
容も充實して來たと多數の人が云つて呉れるが
先日某氏が「中村君近頃の會報は文藝春秋を思
はせる様な素晴らしい編輯ぶりだね。」と云はれ

た。……會報に對して認識を持たれる事は編輯
者に熱と力とを與へるものである。

時代は移る 僅か十年の間であるけれども變
るものである。古い藥學校時代の卒業生から見
れば尙更有爲轉變の著しきには驚く許りであら
う。個人主義より全體主義へ、自由主義より統
制主義へと力強い興亞の叫びが擧げられたのも
僅かな間である。

自分が在學時代から現在まで約十二年の間に
御黨陶を賜つた丹波、池口、上野の三校長先生
も今は故人となられ、退職された諸先生も多數
ある。

現在母校に御出での諸先生の中、在職年限十
年以上の方を甚だ失禮ではあるが擧げて見ると
阿部莊三講師が二十年、黒塚壽一講師が十八
年、柿沼三郎講師が十七年、飯岡源逸教授、永
松元一教授が各十六年、秋谷七郎講師が十四年
伊藤辰治教授、武藤重市書記が各十二年、内藤
多喜夫教授が十二年、慶松一郎、鈴木秀幹、鈴
木爲雄、堀田正弘諸講師が各十年である。

以上の方々はその十年一日の様に我々を
熱心に御指導下さつたのである。自分は今更の
様に考へるのであるが、此等諸先生を何かの形
式で御慰勞申上げたいと思ふ。東藥會總會の様
な席上で記念品を贈呈するのによいと思ふ。恩
師の爲に其子弟が感謝する光景は何んと和やか
な氣持よいものではないでせうか。特に東藥會
役員諸氏の御一考を煩はしたい。

(筆者は母校助教授)

追憶斷片

專12回 山口泰一郎

東藥會編輯部より何かに在學時代の憶出を書け
といふ註文が参りましたが、生來文章の不味い
私は筆をとらずにもつと、優秀な方の原稿を
澤山載せて戴き度いと考へて居りました所、再
び件の原稿につき催促を受けましたので貴重な
紙上の一隅を拜借し母校在學當時の追憶の一端

と述べさせて戴きます。即興に過ぎませんが其
其點惡しからず。

母校を出てから八星霜、時代は自由主義經濟
より準戰時經濟へ、統制經濟に移り變つて参り
ました。世の中がかく移り變るにつれ學生生活
も、其に順應して非常なる變化を見せて居りま
す。私が母校在學當時は學科實習何れも概して
眞面目に學んだ積りですが、それでも午下り午
後二時半武藤先生、角倉先生等の「伊藤君、宇
山君、江端君」と呼ぶ出席がとり終ると一時
には往々三時、三時半の事もありましたが一
學生は今日に馬鹿に出席が遅いな、といふ嘆息
も聞きました。二、三の有志篤學の士を除
いては恰も出席が「歸れ」の命令である如くさ
つと實習衣を實驗室の下に押込み、學校よりど
ん／＼歸つて行つたものです。これが刑法に所
謂相當因果關係説により説明出来るか何うかは
知りませんが、兎も角我々の卒業する時分には
現在の所謂就職口といふものは皆無といつても
よい位でしたので、これから將に社會の第一歩
を踏まんとする當時の我々も多くは何處へ
就職するかといふ事は考へず、考へてもそれ
は可能性が乏しかつた——唯漠然と卒業すれば
何とか口があるだらう位に考へて居りました。

然るに唯今の在校生は何うでせうか。毎朝七時
半に一齊に登校して號令一下ラヂオ體操をやつ
て心身の鍛練をし、午後四時迄は大多數の學生
が學科と實習にワキ眼もふらず精進して居りま
す。我々が母校を訪れると何時も必ず「これな
らば優秀な技術者が澤山出るな——」と感じま
す。時代の然らしむるせいでせうか？ 然し乍
ら其不斷の勉強の報酬として三年生には己に卒
業せざる内に私共の就職したくなる様な立派な
就職口がきまり、雇傭者側から余程早く申込ま
ないと「東京藥學士賣切申候」と斷られる現状
と聞いて居ります。今の東藥生徒はよく勉強も
する立派な就職口も余り多くて生徒の方から逆
に會社を試験して入るといふ工合ださうです。
時代の波に乗つてゐるとは云へ誠にうらやまし
いです。今の東藥在校生は實に幸福です。
(筆者は商學士特許辯理士)

マンガン硝子 此の結果より觀ればマンガン硝子が最も適光には
佳良であります。(晴峰)

乳母に就て

生れて一ヶ月の乳児には出産してより一ヶ月の
乳母を頼まねばならぬ。二三ヶ月前の乳母を頼む
と乳児は忽ち消化不良を來す。即ち適應食でない
のである、乳の濃度が異なる。二週間以上の適
應食とならぬ。且つ出來得る限り乳母は健康と似
た體格の人が良い。乳が出ない位の弱い母親であ
るから餘り健康なる乳母では不適当である。

殺菌力強い調製ハミガキの製法

調製商標は普通の粉商標に鉛、グリセリン、石
鹼液又は流動パラフィンを加へ一定の濕度を與へ
て製するものである。

炭酸マグネシア	一〇〇瓦
硼砂	一〇〇瓦
イリス根末	二〇瓦
ザロモール	二〇瓦
冬緑油	二〇瓦
メントール	二〇瓦
以上の處方の如き粉末商標に	
五〇％グリセリン	八〇瓦
石鹼末	一〇瓦
流動パラフィン	一〇瓦

右の處方(本法は特許)の如きを加へて濕潤せし
める。殺菌劑としてコロカルバクテロールを全量
〇・〇一〇〇二％の割合に加へればよい。尚廿
味劑としては溶性サツカリンを用ふる。(柏蔭)

成毛武夫君(專6)の榮譽

猫入らず本舖成毛英之助氏令弟武夫君(6)は
母校卒業後日本大學醫科に學び醫學士の稱號を
獲得、大養外科病院副院長となり其の傍慶應大學
藥學部教授に就き研究豫て學位請求論
文提出中の處昨年十二月下旬同大學教授會に於
て通過本年二月學位を授與せられた洵に御目出
度限りである益々自重新道に御貢獻あらんこと
を切望す。

因に同君の論文は次の通りである。

主論文「テトロドトキシシン」解毒ニ關スル研究
副論文「ポリガモール」ノ強心作用ニ就テ。「コ
ラミン」劑ノ剔出蛙心臓ニ對スル作用ニ就テ
○果糖ノ強心作用ニ就テ 以上

走馬燈の樣です

專13回 赤沼忠次郎

あれこれと「思ひ出」の糸を繰り出さうと努力を致しましたが全く手懸りなく、寫眞ブックを展げて恩師舊友の姿を偲び只々萬感交々疎る

と云ふのみで盡きてしまひます。

薄暮の後に速度の早い走馬燈をめぐらして眺めてゐる様にどの時、どの事、どの處もはつきり云へません。もどかしいが、どうにもこれが「思ひ出」だと書き表はせません。楽しかつた

と云へば嘘になり、又苦しかつたと云つても嘘になる。どう説明して良いのか判りませんが、只すぎし三年間が今あらためてしみじみ懐しいと思ふのみであります。

(筆者は神田にて米穀問屋經營)

十年の東藥生活より

專13回 玉井 協

學生生活三年、引き続き助手生活七年の東藥生活にも終止符を打つ日は來た。この十年の日月を回想すると走馬燈の如く、あれやこれやが腦裡に閃いて來る。極東の一隅に踞してゐた我が國が滿洲事變を契機として興亞の新使命を擔つて世界の檣舞臺に乗り出した。總ゆるものが移り變り滔々たる自由主義の時代も統制の時代へ、總親和の時代へと流れ來た。

この間我が東藥校長の椅子も池口校長から上野校長更に現鍋島校長へと移つて來た。教授も十年以上勤務されてゐるのは永松、内藤、飯岡の三教授でその他の職員も殆んど顔觸れは異つて了つた。この時代の潮流は學生達の上にも及んで來た。個人主義より全體主義へ、放縱の觀念より奉仕の觀念が芽生えて來た。誠に結構な事である。時々卒業生が學校にやつて來て云ふことには「この頃の學生は俺達の時代と比べて大人しくなつた。眞面目で良く勉強してゐるね」と感心する。これは事實かも知れない。然しこんなことを云ふ連中はその學生時代には相

して置けば良かったと嘆息を洩す輩に多いらしい。確かに學生のレベルは上つてゐるだらう。換言すれば昔に比べて成績が悪くて持て餘すと云ふ者は少くなつた。僕の時代には所謂五年生なる者が五、六名はゐたと記憶してゐるが、その後は餘り見受けられない様だ。だからと云つて必ずしも出來の良い學生ばかりだとは云へぬ。現



生先野上 故

爲に一年を棒に振る學生も無いとは云へぬ。興亞の大使命を擔ふ學生はもつと大道を歩むべきだと思ふが、どうも學生とカンニングは分離され難いらしい。

又學生中には藥劑師及び關係者の子弟が多い爲か俺は藥劑師の資格さへ取れば事足りるのだから、勉強の方は落第せぬ程度にして置いて呑氣に遊んで暮した方が氣が利いてゐるなどと考へる不心得な連中も大分ゐる。その爲か一般が餘り勉強しない様だ。これは卒業さへすれば就職口は轉り込んで來る。有難い御時世ではあるしそれに學校でも最近成績表に席次を附けないで優良可で示すだけだが卒業成績などになる

傾向としては大岡山の工業大學志願者が増加して來たことだ。昨年度卒業生は四名の内三名合格したのでから今年の卒業生にとつては大分自信が増した譯だ。その爲か今年には百三十有餘の卒業生中十人近くの志願者がある様だが、これは母校にとつて喜ぶべき現象か否か自分には判らない。僕の學生時代には池口校長の口から東藥はその内容を益々充實せしめて専門學校より藥料大學に迄昇格せしめ度いと大なる抱負を述べられたのを記憶してゐるが、最近はその裏にこんな話を耳にしない。亞細亞の盟主たる日本に私立藥料大學の一つ位出現して欲しいものだ、話は太分脱線したが、母校の發展と共に東藥會報もその使命に向つて邁進されんことを祈つてゐる次第であります。(三月四日柏木にて)

(筆者は母校有機化學教室助手として勤務すること七年、今般辭任されて實業界へ活躍することとなつた)

俳句會の思ひ出

專13回 西出 俊平

吐天先生がよく、東藥俳句會をはじめたのは西出君等だ」と云はれるが、この光榮は或は當らないかも知れない。何となれば、私等の前に東藥俳句會なるものがあつたかも知れないし、私等の創めた鳥頭句會が現在の東藥俳句會の前身であるかと云ふと、必ずしもさうだと確言出來ないからである。鳥頭句會は私等の努力にも拘らず後繼者を待たず、私等の卒業と共に校内には絶えて仕舞つた。そして其後二三年してから現在の東藥俳句會が成つたのである。強ひて云へば、等しく吐天先生の御指導を仰いだ事、東藥會報に句會報を載せた事等に於て現在の東藥句會となつたが、あると思はるのである

鳥頭句會と云ふ名稱は、たしか高野附子君邊りが「うづく」と云ふのが當時流行の「イット」が感じられてよいとのことで採用したのであるが、これは東藥俳句會と素直に付けて置けばよかつたのであらう。この句會が我が卒業の後ま



俳 壇

内藤 吐天選

齊田 栖英

飯 島 正

辻村 玉瓜

高士 天兒

岡本 ゆきを

伊賀 まさる

式根 島

潮鳴りに牡丹くづるゝ春寒き

軍事郵便一片の寒き遙かに來し
春寒き梢仰ぎて何もなし
天の寒き筒抜けに若し梅の花
紅梅や風が寄せたる田の水
早春や海苔ビチ／＼と乾く音
受験生互ひの遅日默考す
啄木鳥叩き雪峰遠く昏れずあり
雨となれど野空かぐはし春となり
木の芽雨昏れがたの潮瀬よく響く
海陽さん／＼とつゝ芽吹く岡
残雪に沈丁花ほぐれ暖かき
蜜柑山照る日は夕路はるかなる
ベルトめぐり屋根の大霜とけに
風の子に枯原の日はひろがりぬ
鴉鳥にさす水ありて音すなり
雪晴の温泉にあり四方の照りきし
濱昏れて藻屑よせ焼く春隣
枯蓮の間に小鴨の翔け來たる
残る雪ふぶく火口にひさしなす
薪割れば木の芽明るうこだませり
笹鳴や病後の爪を陽にかざし
笹鳴く日床上げの餅もらひけり
庭 苔の土離れして寒雀
木々の闇たちまち動く焚火かな
早春の海鳴りゆるむ浮氷かな
早春の黄なる林に潮青む
夕潮に海草青む春浅き
潮鳴りに牡丹くづるゝ春寒き

しこんなことを云ふ連中はその學生時代には相
當サボツて社會に出てつと學校にゐる時勉強

と慢の数が一番多いらしい。何とか學生に向學
心を喚ぶ旨の方針はないものか。それに最近の
で残らなかつたものこの名稱が一因をなしたの

海鳴りに引かれてゐる、イヌミ
高橋龍浪

鳥鳴會は私等の二年の時、昭和五年十一月
横山丹砂君、高野附子君等の手により、第一回
句會を催すことになつた。寒い教室に於てであ
つた。記録を見ると發起人の一人たる私は病氣
の爲缺席したとある。出句者は横山丹砂、高野
附子、玉井かな夫、尾崎海桐、小倉翠清、小橋
しげ尾、岡田翠濱、西出玫瑰花であつた。

やがて會を重ねる毎に参加者も増えて行つ
た。和田冬葵子君などと云ふ達者や清新な句風
を持つて來た。岡野紫明君をはじめ山口紫村君
山田紫苑君等の所謂東藥寮派や、當時私の他の
方面での相棒であつた伊藤勇君なども白芷と號
して自發的に入會して居るのである。終りに彼
是二十八人位にはなつたであらう。

句は丹砂君が斷然他を抽いて居た。結局丹砂
君の獨壇上であつたのである。何しろ初心者が多
いのであるから随分奇抜な句もあつた。當時
の高點句を拾ふと

霧底にまた立太る焚火かな 丹砂
學寮の朝まだ寒き蜆汁 紫明
桃活けし女あるじの笑顔かな 附子
根分けする土の濕りやあたゝかな 冬葵子
たちまちに火走る蔓や草を焼く 丹砂
一灣の波高まつて時雨けり 玫瑰花

現在の東藥俳句會は吐天先生の御指導に因つ
て、坂歌、敏三、綠石、正、杏花、まさる、天
兒、龍三郎、其他の優秀なる作家諸君を東炎に
送り出し、又昨年會報に東藥俳壇を設けられて
からは秋期、王瓜氏等既に他の俳誌で名聲を得
られ居らるゝ先輩も参加せらるゝ様になつた。
又飯岡紫西先生も突然起つて佳吟を示して居ら
れる。今後益々その隆盛を期待するものであ
る。(筆者は警視廳瓦斯検査所に勤務)

思ひ出より

專14回 金指義晴

私の入學した時は學校が上野の舊校舍より移
轉した翌々年であつた。その當時は大久保驛よ
りも東中野驛から登校する學生が多かつた。そ

の中の私も一人であつた。少し土地に馴れて來
ると大久保驛より登校する様に自然となり、何
れにせよ細いくね／＼した穢ない不衛生な道
路で、雨の日などそれこそ泥んこでゴム長靴が
一番である。今日の様に立派な道路など夢想だ
に出来ない。又學校は本當に殺風景でトタン堀
にかこまれ工場そのものゝ様で、胸像もなけれ
ば温室もない。勿論池口記念館はありはしなかつ
た。只だ校舍裏の高臺に周囲と不調和に相撲
場が威容にすつきりと立つて居る。此は故池口
先生が何より學生スポーツとして相撲に熱心だ
つた表徴なのであつたのでせう。私が本當にが
つかりしたのは確つとした一年教室がなく講堂
兼一年教室なので豫備校的で何處を押しても藥
學專門學校と云ふ感じはしない。先生が教壇に
あがればそれこそ今にも拍手が起りさうな氣念
がし、聲の低い先生の講義ときたらうしろに居
た學生には全然聞えない。微かにでも聞きとれ
たら未だ良い方だつた。勿論先生には罪はない
罪は教室にあるのだ。従つて試験には殊勳丁丙
が相場で乙など上出来だつた。楽しみだつたの
は野球のシーズンになると松野先生のお名調
子の六大學野球試合豫想で、講義前必らずねだ
りては豫想を拜聴する。早慶戦前などは興味
百パーセントです。こんな事をしては講義時間
二、三十分を喰ひ込ませる一種のスリルを味はつ
たものであります。あとでわかつたのですが、先生御
自身一度も野球見物に行つた事がなかつたとの
事。だあ一とならざるを得ませんよ。而しあの
野球豫想だけは永久に耳の底に残つて居る。一
生涯の思ひ出の一つでせう。新緑満ちる五月にな
ると新入生歓迎旅行があり伊香保に行つた。上
級生の氣風、即ち東藥風に如何なくふれた。そ
して又充分にその氣風に浸り始めて本當に自分
が東京藥專の學生である事をはつきり認識する
事が出来た様な氣がし、其以後毎年旅行だけは
欠かした事はなく、楽しみの一つであつた。今
は一年の一學期よりすぐに分析實習があるが、
その當時は二學期になつてから分析實習が始ま
る。初めて白衣を着たときの氣持は誠に愛すべ

きで一人前の化學者になりたし、未來にノー
ベル賞をめざす意氣又熾なり。自分の白衣の立
派なる姿を親兄弟、友達に見せてやりたい。斯ん
な氣持の現れでせう。晝休に白衣のまゝ校外に出
歩く者がよくあつた。實習室内は只だ理もなく
嬉しさの興奮に難然とうごめいてゐる。物珍ら
しい硝子器具！それからバナー、私は何處
も／＼バナーの中に火を入れた。今思ふと腋
の下でもくすぐられた様に思はず／＼と吹き出
したくなる。在學中の諸君はその時の實習指導
の先生は到底考え及ばないだらう。それは今事務
所に鎮座する武藤先生だつたのだ。何處の學校
でも先生の綽名は付きものだ。學校中で一番有
名なのは植物實習の先生で、三角コルベンと云
ふ綽名だ。誰れしも先生にお會ひした人は大き
く領ける事でせう。誠に遺憾に思ふが學生間で
は先生の本名を呼ぶ者は一人もない。而し此は
決して惡氣で云ふのではなく、むしろ先生に對
する親しみの心情の發露なのでせう。とやかく
する中に三ヶ年は夢の様に過ぎ私も人並にとこ
ろ天式に押し出された。卒業後一年ばかり帝大
藥局に厄介になり再び母校に舞ひ戻り元氣一杯
若鮎の如き學生諸君と共に毎日を愉快に過して
ゐる。今私は且て學生だつた時先生からして貰
ひたかつた事々をしてやりたい氣持で一杯だ。
何事も學生の立場になりて考へてやり又思ひや
つてやる様に務めて居る。私の考が誤つてゐ
ない様な氣がする。そのせいか學生が私を見貴
の様にしたつて來る。思ひ出は遠き／＼昔の様
に、はた又時にはつい二、三日前の出來事の様
にも思はれ泉の如く湧きいづる。母校は年と共
に進歩發展して行く。東藥會報も百號の萬壽を
かさね、實にすばらしい總てが一大飛躍だ！
腹の底の底より彌榮を叫びたい！萬歳を叫び
たい！(筆者は母校調劑學教室勤務)

懷古

專18回 武者宗一郎

私の様な若輩には勿論取るに足る可き筈の懷
古錄など持合せないのが當り前だが、この大東

新雪に山肌光り連れり
一ト群の鳥過ぎてまたの夕吹雪
山路來てまだ日ある野に木の芽
木の芽晴れ古江の鴨の光り飛ぶ
小串 蛭村
伊香保行
日は白く杉肌乾して雪消えず
硫黄噴く山谷狭く雪に昏るゝ
朝窓に榛名は白く凍てしまゝ
小島 青綺
栗牡丹の色にこりして春近し
瀧壺のあふれて深き木の芽晴れ
榎木立ひそけきまゝに寒の雨
たなご釣る川邊雜林芽吹きをり
西出 玫瑰花
春隣る谷の流木ひしめきて
濠晴れて氷縁あるく鴨の影
岩田 まさみ
冬木立ゆがみて過ぐるバスの窓
雪除けのまだある庭や木の芽雨
小林 江南漁夫
熔鑪爐の火赫く玻璃戸明。残る雪
まことの芽潮差し來たり濁光る
岸 紫草
横しぐれ岩礁黒く吹き尖り
芽生えする白木蘭や春隣
渡 水峰
寒月や野に捨てゝある柚の墓
近 藤裏葉
埋火の灰のうすさや春近き
永 井仁
東風吹いて山路はるかに残る雪
大河 原亞水
凍雪に吹き荒ぶ野路暗くして
伊 藤榮華
南天のうら日にぬれて春眞近
加 藤秋鹿
春近き野水ゆたかに目高浮く
七 尾森
大廈見つゝ砂利舟の子等に春いた
飯 野大樫



移動 消息

- ◇小林 嘉夫君(18) 北京東城三條胡同々仁會北
- ◇小島 龍雄君(18) 日本橋區本町三の五の四
- ◇井上 菊雄君(17) 明治製菓株式會社試驗部
- ◇韓 正元君(19) 東京府大和町一の五一朝鮮
- ◇倉重 熊一君(元) 山口縣宇部市藤山區字居能
- ◇赤崎 勉君(19) 滿洲國齊々哈爾濱見部隊佐
- ◇久野 貞雄君(5) 京橋區京橋二の一三井尻齒
- ◇市川 文藏君(14) 牛込區改代町二六勤務先東
- ◇天野 謙太郎君(元) 京市立榮地病院
- ◇平佐 守君(19) 滿洲國北安鎮佐久間部隊氣
- ◇三橋 吉兵衛君(五) 舊名衛吉を新名吉兵衛と改
- ◇森 克己君(19) 青森市浦町橋本三一五の三
- ◇佐竹 育君(19) 滿洲國北安鎮佐久間部隊氣
- ◇保坂 俊夫君(15) 出征中の處一月十二日召集
- ◇谷元種太郎君(五) 自宅中野區昭和通二の三五
- ◇荒井 謙二君(10) 朝鮮釜山府草場町二の四一
- ◇山下 良一君(18) 帝大附屬病院藥局辭任陸軍
- ◇赤須 通美君(六) 三共株式會社研究室を辭任
- ◇山下 邦次君(8) 世田谷區世田谷町二の一四
- ◇梶村 勝君(10) 千葉縣銚子市妙見町二の一
- ◇木村 二朗君(9) 神奈川縣藤澤町鶴沼一八一
- ◇永井 重則君(19) 豊橋歩兵第十八聯隊第六中

- ◇山田 貞夫君(17) 蒲田區新町四の二〇〇同方
- ◇土川 哲三君(18) 芝區白金三光町二七三森隆
- ◇村木 俊雄君(19) 荒川區尾久町三の二四八三
- ◇木村 二郎君(19) 宇都宮歩兵第五十九聯隊第
- ◇關 勝行君(17) 四中隊第二班へ入隊
- ◇齋藤 利一君(17) 富山縣婦負郡速見村日産化
- ◇谷口 文男君(17) 學工業株式會社々宅
- ◇小林 民部君(9) 埼玉縣比企郡福田村大字和
- ◇圓城 登君(13) 神田區淡路町二の二
- ◇深澤 忠利君(15) 足立區千住旭町六七
- ◇杉田 慶次郎君(三) 大阪市東淀川區三津屋北通
- ◇英二君(13) 一丁目澤藥品會社
- ◇千葉 俊夫君(19) (舊姓高野)
- ◇山中喜三郎君(15) 藤永藥品會社退社旭川三條
- ◇小山 一郎君(5) 通七の右六號
- ◇山崎 謙一君(15) 漢口中山路長號(藥房開業
- ◇太田 惣太郎君(10) 葛飾區西條原町一四六
- ◇水谷 圭介君(12) 世田谷區世田谷二の一三六
- ◇永越 貢君(元) 五後藤方
- ◇角永芳之助君(15) 大森區池上德持町二二二
- ◇岡田 安平君(三) 富山縣警察部勞務課(榮轉
- ◇小口 安平君(三) 神奈川縣川崎市中幸町一〇
- ◇加納 巖君(3) 新沼縣高川市仲町三丁目
- ◇上原 忠治君(五) 岐阜縣加茂郡八百津町五八
- ◇石井 家の計 新沼縣糸魚川町新田

浸透劑及浸透性試驗法	昭和十四年度	尾川岸太
合成燐光體	昭和十三年版	箱守新一郎
化學語彙	同 改訂版	日本化學會
無機化學概要	同 第九版	柴田 雄次
生藥學	同 第十版	柴田 雄次
化學工業年鑑	同 十四年度	下山・朝比奈・藤田
Schneider Zimmermann, Bakteriologische Mikrotechnik 1922	化學工業時報社	
Bowden, Sydney T. The Phase Rule and Phase Reactions Theoretical and Practical 1938		
Ts. hieh, A Tandbuch der Pharmakozinose	Lieferung 18—21	
雜誌		
植物化學雜誌	昭和十四年度	1 號
日本化學總覽	同 第二集第十三卷	1 號
植物化學雜誌	同 第十五卷	2 號
日本農藥化學會誌	同 第十五卷	1 號
藥學雜誌	同 第五十九卷	1 號
理化學研究所彙報	同 第十八輯	1 號
衛生化學會誌	同 第十一卷	1 號
工業化學雜誌	同 第四十二編	1 號
Reichle		
71 Jahrg. Nr. 11—72 Jahrg. Nr. 1		
Angewandte Chemie		
51 Jahrg. Nr. 41—52 Jahrg. Nr. 5		
Zeitschrift für analytische Chemie		
114 Band Nr. 7—12		
115 Band Nr. 1—12		
Zeitschrift für anorg. und allgem. Chemie		
239 Bd. Heft 4—240 Bd. Heft 1—3		
Helvetica Chimica Acta		
21 vol. Nr. 6, 索引		
Industrial and Engineering Chemistry		
Industrial Ed. vol. 30, Nr. 11—12		
vol. 31, Nr. 1		
Analytical Ed. vol. 10, Nr. 10—12		
—11 Vol. Nr. 1		
News		
Ed. vol. 16, Nr. 19—24		
—17 Vol. Nr. 1		
Chemical Abstracts		
32 vol. Nr. 19—23		
—33 Vol. Nr. 1—2		
Journal of the American Chemical Society		
60 vol. Nr. 10—12		

Pharmazeutische Zentralhalle	—1901 Nr. 1
79 Jahrgang Nr. 41—52	
80 Jahrgang Nr. 1—5	
Archiv der Pharmazie u. Berichte der Deutschen Pharmazeutischen Gesellschaft.	
1938 Nr. Heft 7—9	
—1989 Nr. Heft 1	
寄贈の部	
實用日本藥學	栗原 廣三
主要毒瓦斯の化學的檢知法	小笠義三
附 防空防毒關係法令	歐文社
全國上級學校大觀	
バイエル創業五十年史	
ニツケル合金	日本ニツケル時報局
成田山開基一千年紀念藥草園叢書第一編	
蘭藥辨安	甲田、今澤
食品化學	西弘太郎
化學通論(昭和十一年版)	鮫島實三郎
風土記と古代日本	次田 潤
徳性としての科學	田邊 元
道元と日本の禪	同 28
財政經濟より觀たる支那	同 30
宮中祭祀の御覽	同 31
菅家遺訓 和魂漢才	日本精神叢書40
奈良時代に於ける國家と佛教	同 41
自然科學者の態度	教學叢書7
我が國の資源に就いて	同
財政經濟より觀たる支那	同
我が國數學の進むべき道に就いて	同
政治と教育	同
中觀思想と日本文化	同
日本の教育と反省	同
日本の文化的責任	同
帝國及列國の陸軍(昭和十四年度)	陸軍省

重訂本草綱目啓蒙 蘭山小野口授 嘉納小野口授
藥三井口重訂

校 報



一月十六日 一年豊田清君今時事變當初より出征各地に轉戦、名譽の戦傷を負ひ療養中の處芽出度快復本日より復學

一月十九日 三年生に對し文部省無機及有機藥品製造學の試験を課せらる

一月二十一日 三年生加藤弘平君陸軍藥劑見習士官に採用せらる

三月九日 本校第二十回卒業證書授與式を施行す、卒業生一三一名

母校入學試験施行

昭和十四年度母校入學試験は次の通り施行され、志願者は總數七五二名であつた。

三月二十三日 學術試験

代 數 午前九時より同十一時まで二時間
歐文和譯 正午より午後二時卅分迄二時間

三月二十八日午前七時、以上學術試験合格者發表、同日午前九時より人物考査及身體檢査施行され、三十日午後榮ある入學許可者百五十名發表さる。

尙學術試験問題は次の通りである。

代 數

(1) 斜邊ノ長サガ 8cm ナル直角三角形アリ。其ノ内切圓ガ斜邊ニ切スル點ト斜邊ノ中點トノ距離ハ 1cm ナル時他ノ二邊ノ長サヲ小數點以下第三位迄正シク計算セヨ。

(2) 次の方程式ヲ解ケ。

$\log_{10}(x-1) - \log_{10}(x+1) = 2 - \log_{10} 2$

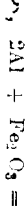
(3) 三數 $x, x+1, x+2$ ガ鈍角三角形ノ三邊ノ長サヲ表ハス數トナル様ニスルタメニ、 x ノ如何ナル範圍ノ數デアルベキカ。

(4)
$$\begin{aligned} y-z &= b-c & z-x &= c-a & x+y &= a+b \\ y+z &= b+c & x+x &= c+a & x+y &= a+b \end{aligned}$$

化 學

(1) 漂白粉(クロールカルキ)の製法及用途を問ふ。

(2) 次の方程式を完結し、各化合物の名稱を其の下に記せ。



(3) 次の20種の元素中より、鹽素族元素、鹼素族元素、ハロゲン族元素、アルカリ金屬類、アルカリ土金屬類に屬する元素を抜き出し分類せよ。

Ag, As, Ba, Br, C, Ca, Cu, Cl, F, J, K, Li, N, Na, O, P, Pa, S, Si, Sr.

歐文和譯 (英語)

(1) There are three dominant moods in man—practical, emotional, and scientific—each with its subdivisions. They correspond symbolically to hand, heart, and head and they are all equally necessary and worthy. "And the eye cannot say unto the hand, I have no need of thee: nor again the head to the feet, I have no need of you." They are all worthy, but most so when they respect one another as equally justifiable outlooks on nature, and when they are combined, in adjusted proportions, in a full human life.

(2) The applications of science are often in the hands of people who have no scientific knowledge whatever; for example, it is not necessary to have any education or instruction in order to drive a high-powered car which may cause any amount of destruction. But even scientists might be tempted to misapply their knowledge under the influence of a strong passion. The scientific spirit must be itself assisted by other forces of a different kind, — by religion and morality.

歐文和譯 (獨逸語)

(1) Das Fortschrittsbewusstsein, Wissen und Handeln...

n, ist eine regel-mässige Arbeit mit bestimmten Tages- nicht Nachts-stunden zu schaffen und sechs Arbeitstagen in der Woche, nicht fünf und nicht sieben. — Die Nacht zum Tage zu machen, oder den Sonntag zum Werktag, das ist das Mittel, niemals Zeit und Arbeitskraft zu b. sitzen. Auch das wochen- und monatelange sogenannte "Ausspannen", hatte sein Bedenk-liches, wenn es gar wörtlich genommen wird und eine völlige Enthaltung von aller Arbeit bedeutet.

(2) Hinter einem in seiner vollen Blütepracht ausgeschweiften Apfelbaum erhub eine gerade Tanne ihren spitzen dunklen Gipfel. Zu dieser sprach jener: "Stehst du die Tausende meiner schon munteren Blüten, die mich ganz bedecken! Was hast du dagegen anzufeuern? Schwarze Nadeln!" — "Wohl wahr," erwiderte die Tanne, "aber wenn der Winter kommt, wirst du entlaubt dastehen: ich aber werde sein, was ich jetzt bin!"

昭和十三年度

會費領收報告 (四)

山田 只平	會 費 領 收 報 告	西山 政雄
小口 安平	高橋 健三	包坂 貞吉
佐田 樂造	森 兼雄	荒井六太郎
田中 喜義	榎森 長治	中田 秋雄
前田 孝吉	植田 良造	佐藤 貞吉
岡田 十一郎	植田 治八	中塚 浪吉
岡本 彌八郎	三ツ野 美文	小島 兼吉
星野 武雄	田丸 憲	高橋 俊次
田島 紋吉	三澤 忍一	宮崎 重吉
松尾 顯壽	神藤 英保	高山 繁
進江 三郎	佐々木 健	伊藤 翁芳
石谷 熊大	小澤 武八	船橋 輝信
稻葉 清秀	生熊 喜太郎	山本 忠雄
有賀 國吉	井上 廿吉	藤原 隆行
青藤 榮太郎	富岡 義太郎	速水 潤次郎
石名 繁雄	山室 三郎	

昭和十四年四月十日
東京市會
三井物産
小野道雄



ひとりの會曜土

三井物産
東京市會
昭和十四年四月十日
東京市會
三井物産
小野道雄

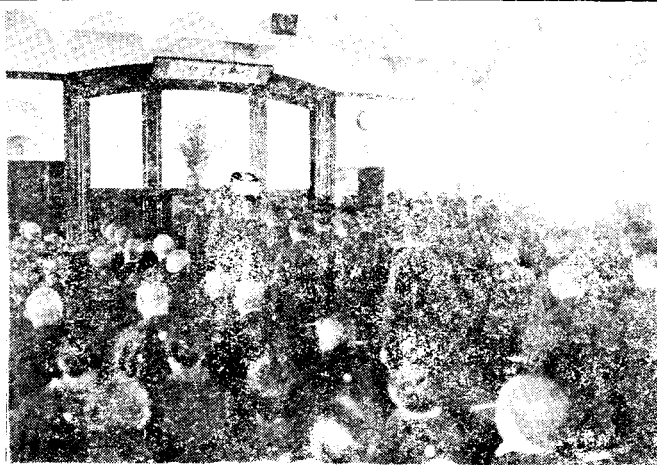
母校第二十回 卒業證書授與式

母校第二十回卒業證書授與式は去る三月九日午前十時母校大講堂に於て舉行せられた。當日は文部大臣代理寺中事務官、衣笠厚生省東京衛生試験所長、服部東大教授、大口財團理事長、秋谷女子部長、今野厚生省東衛技師、河合日本藥劑師會長並に財團東藥會役員、其他來賓父兄及在學生多數列の上先づ敬禮、國歌合唱、後鍋島校長より本年度卒業生百三十一名總代菊本嘉郎君に對し卒業證書を授與、次で在學三年間皆勤者十五名、總代加藤弘平君へ賞狀を授與され、更に鍋島校長は式辭として別掲の如く巢立若人の將來の爲に切々たる教へを訓された夫れより文部大臣祝辭代讀、續いて衣笠東衛技師所長、服部東大教授、河合日藥會長、大口財團理事長等の祝辭及熊本藥學專門學校長外四氏の祝電披露あり、次で在校生總代二年生栗野正君の送別の辭があつて後、卒業生總代兼子康孝君の答辭朗讀があり最後に國歌合唱、敬禮を以て今前十一時五十分芽出度閉式。これより來賓父兄は別席に於て茶集の饗應を受けた。

式 辭

鍋島 校長

第二十回卒業式ヲ舉行スルニ當リ特ニ文部大臣閣下ノ御名代並來賓各位多數ノ御來臨ヲ辱フシマシクコトハ本校ノ光榮トシテ洵ニ感謝ニ堪ヘザル次第デアリマス
本日卒業證書ヲ手ニシタル者ハ百三十一名デアリマス、國運益々振張シ新東亞建設ノ爲ニ人材ヲ要スルコト愈切ナル秋、新ニ百三十一名ノ優秀ナル卒業生ノ優秀ナル藥劑師ノ國家ニ提供シ得マシクコトハ本校ノ大ナル欣トスル所デアリマス
卒業生諸君ハ多年雪ノ苦ヲ積ミ漸ク此ノ榮譽ヲ勝テ得タルデアラカラ自ラ歡喜ニ堪ヘザルモノアルハ勿論デアリマスガ、父兄各位ニ對



卒業式ノ光景

シテハ其今日迄ノ御心遣ヲ御察申上ゲ只今此ノ席ニ列セラレテ眞ニ御満足ノコトト衷心カラ御悦ビ申上ゲル次第デアリマス
サテ卒業生諸君ハ學校ハ出クガコレガ智慧ノ行キ止リデアッテハナラナイノデアリマス、今後何レノ方面ニ向フニシテモ其職分ニ最モ忠實デアルベキハ勿論ノコト、常ニ自ラ専門知識ノ

千ナルノデアリマス、自分自身ヲ養ヒ僅カニ九ノ様ニ考ヘル處ニ時局ノ認識ヲアヤマル本ガアルノデアリマス
願クバ當ニ健康ニ留意シ如何ナル場合ニモ心ノ平衡ヲ失ハズ自分ノ立場ノ一德命ノ努力ヲスルト云フ確キ覺悟ヲ以テ實社會ニ處セラレンコトヲ希望シマス
諸君ノ卒業ヲ祝シ前途ノ幸福ヲ祈リテ私ノ御挨拶ヲ終リマス

祝 辭

文部大臣 荒木 貞 夫

卒業生諸子ニ告グ、諸子ハ昭代ノ惠澤ニ浴シテ本校ニ學ビ専心研究修養ノ功ヲ積ミテ茲ニ卒業ノ榮ヲ荷フ予ハ諸子ノ爲ニ之ヲ祝シ更ニ邦家ノ爲ニ慶賀指カザルナリ
今ヤ我が邦ハ振古未會有ノ盛運ニ駕シ實ニ東亞ノ盟主トシテ新秩序ノ建設ニ邁進シツツアルノミナラズ實ニ世界ノ先達トシテ國際ノ正義ヲ顯現シ以テ平和ノ確立ト文化ノ振興トニ貢獻セントス其ノ使命眞ニ重大ニシテ國家ガ有爲ノ人材ニ待ツ今日ヨリ急ナルハナシ

諸子ハ此ノ秋ヲ以テ學窓ヲ出デ將ニ人生ノ新シキ階梯ニ上ラントス、然レバ其ノ活社會ニ立ツト其ノ家庭ニ在ルトヲ問ハズ須ク事變下内外ノ情勢ヲ達觀シテ大國民タルノ氣宇ヲ識見トヲ養ヒ躍進日本ノ中核トシテ國家明日ノ建設ヲ目指シ所信ニ篤ヒテハ百折不撓ノ氣魄ヲ尙ビ試練ニ耐ヘテハハ強固ニザルノ努力ヲ盡クシ道ニ從ツテ中正ヲ失ハズ事ニ當リテ私奉公克ク各自ノ職分ヲ通ジテ盡忠報國ノ至誠ヲ輸シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼シ奉ランコトヲ期スベシ諸子ノ前途洋々トシテ多事多難ナルトモニ責務極メテ大ナルヲ思ヒ茲ニ一言囑スル所ヲ陳ベ以テ祝辭ニ代フ
昭和十四年三月九日

祝 辭

東京藥學專門學校 大 口 喜 六
財團理事長

式ヲ舉行スルニ方リ文部大臣閣下ヲ始メ貴賓各位ノ來臨ヲ悉クシタルハ獨リ本校ノ光榮タルノミナラズ本財團ノ最モ榮耀トスル所ナリ
思フニ卒業生諸君ハ夙ニ中等學校ノ課程ヲ卒ヘテ本校ニ入り爾來刻苦勉勵具ニ雪ノ功ヲ積ミテ克ク今日アルヲ致セリ洵ニ慶賀ニ堪ヘザルナリ然リト雖モ諸君ノ前途ハ猶遠ニシテ雄嶮タリ之レヲ千里ノ路ヲ行クニ譬フ恐ラクハ諸君ハ蓋シ其ノ百里ヲ踏破シタルモノト云フベシ、今ヤ我國振古未會有ノ盛運ニ邁進シ吾等國民ハ協力同心堅忍持久以テ一意奉公ノ誠ヲ致スベキノ秋ナリ諸君ハ爾來留ツテ學ヲ究ムルト出デテ業ニ就クトヲ問ハズ須ク小成ニ安ズルコトナク浮華ニ陥ルコトナク德ヲ修メ義ヲ立テ益人格ヲ陶冶シ以テ國恩ニ酬ユルノ覺悟ナカルベカラズ古語ニ云ハズヤ道一以テ之ヲ貫クト嗚呼第スルモ亦樂ミ道ズルモ亦樂ム精神一タビ到ラバ何事カ成ラザラン高山大澤亦タ過グルニ難カラザルナリ、茲ニ所懷ヲ述ベテ諸君ノ前途ヲ祝福ス聊他山ノ石タルヲ得バ欣幸何物カ之レニ加ヘン之レヲ以テ祝辭トス
昭和十四年三月九日

出席者芳名

(敬稱略順位不同)

來 賓

- | | | |
|-----------------|-------|--------|
| 文部大臣代理
寺中事務官 | 衣笠 豐 | 今野 運治 |
| 服部 健三 | 秋谷 七郎 | 大口 喜六 |
| 成島 治平 | 伊澤 弘芳 | 宇津權右衛門 |
| 河合龜太郎 | 三谷桂次郎 | 岩城市太郎 |
| 岩田甲之助 | 池邊 重熾 | 石井 浩 |
| 西池 正顯 | 堀部治三郎 | 星名 謙輝 |
| 千葉 長三 | 尾澤良太郎 | 加藤 雄 |
| 加藤 金多 | 川田 重熙 | 川田秀太郎 |
| 高木 芳郎 | 武井 治郎 | 津村 義男 |
| 内田 兼一 | 上野 篁 | 所 金藏 |
| 三井所清造 | 鈴木 衡平 | 鈴木 秀幹 |
| 坂井 爲吉 | 岡田 信辰 | 桐 種次郎 |
| 栗原 廣三 | 野澤 清人 | 黒塚 壽一 |
| 慶松 一郎 | 中山善道代 | 松岡 敏郎 |
| 小林 留 | 深間内久雄 | 小林 敏 |
| 佐藤 幸吉 | 榎本 康夫 | 阿部 莊二 |
| | 佐々木康之 | 齋藤 初藏 |

新発売 (純國産)

連鎖状及び葡萄状球菌性
疾患の化学療法剤

プロセプチン

PROSEPTIN

(白色ズルフオンアミド剤)

プロセプチンは、連鎖状球菌並に葡萄状球菌等に對して殺菌力強大なるを知られ、臨牀上是等病菌による全身的、局所的症狀の一般に著效を奏し、又、尿路の細菌性疾患並に肺炎等に良果を收め、普通用量にては何等嫌忌すべき副作用を認めざる最新化学療法剤なり。

適應症 一般敗血性諸疾患、産褥熱、丹毒、肺炎、アングナ、敗血膿毒症、多發性關節炎、蜂窩織炎、重症化膿性創傷、化膿性淋巴腺炎、カルブンケル、フルンクローゼ中耳炎、扁桃腺炎、敗血性猩紅熱、急性及慢性關節炎、骨髓炎、炎衝性尿路疾患、膀胱炎、腎盂炎等々。

包裝	粉末	25瓦入	¥ 3.00	100瓦入	¥ 11.00
	錠劑 (0.3)	20錠入	¥ 1.00	100錠入	¥ 4.50
	(1.0)	10錠入	¥ 1.50	50錠入	¥ 4.00
		100錠入	¥ 12.00		

三
SANKYO
共

東京市日本橋區室町

三共株式會社